

經樹が寫させたるを、松田直兄が板にせしこと、天保九年の再記に見ゆ。

註

三奏金葉集附録 一卷 寫

家藏本は子爵水野忠款氏所藏松田直兄の自筆本により他と訂正せしもの。

校訂金葉集 一 卷

井上通泰

續類從初度本、八代集抄本、正保本、桂宮本、圖書寮慶長本等諸本を以て、嚴密に校訂せるもの。始に撰者のことと諸本のことなどあり。明治四十二年上板。

金葉和歌集抄 三 卷

北村季吟

八代集抄の内、卷二十九より三十一まで。

金葉和歌集書入 一卷 寫

平成文庫

文化九年所々頭註を加へ、又抄の説を引く所あり。後文政九年伊庭秀形異本を考合せ、書入をなせること、文政九年の奥書に見ゆ。この他大江素雄が天保二年に校定せし本あり。松井簡次氏所藏たり。

金葉集存疑 一卷 寫

岡本保孝

況齋叢書卷三十五に收む。紙數八葉。

詞花和歌庫 十 卷

崇徳院の仰により、近衛天皇天養元年、藤原顯輔勅を奉じて撰す。部立は金葉集に同じ。但し連歌部は設けず。歌數八雲御抄及袋草子には四百九首とあり。國歌大觀には尙二首多し。今川了俊の言塵集にあまり一體ばかりに趣けられたる故にや後代の難も少しありとかや云々と見えたり。平明の作多し。

阿波文庫本詞華集 一 卷

土佐國に三百餘年前より傳りたるものにして、萩原宗國の跋あり。流布本とは少しく異なる。

校訂詞花集 一 卷

井上通泰

桂宮本、寛文七年山田謙士冬木の寫せる圖書寮本、原六郎氏藏本、正保版本、その他、詞花集註、後葉集、古來風躰抄等を参照し、校訂せるもの。始に傳記等を載す。明治四十二年上板。

註

詞 花 集 抄

壽永二年八月仰により、本集の歌百七首を抜きて註し、元暦元年重ねて一見を加ふ。片假名交にて記す。弘安五年飛鳥井雅有の奥書あり。

詞 華 和 歌 集 抄

二 卷

北 村 季 吟

八代集抄の内卷三十二及三十三の兩卷。

詞 花 和 歌 集 書 入

一 卷

伊 庭 秀 形

頭書又は歌の側に、少し註を加ふ。文化八年の奥付あり。

詞 華 集 類 礎

一 卷 寫

いろは順、五句の末尾の字にて歌を並ぶ。

詞 華 集 存 疑

一 卷 寫

岡 本 保 孝

集中の歌の如何と見ゆるを、少しばかり抄して意見を加ふ。紙數縁に三葉。況齋叢書卷三十五に收む。

季 註 提 要

四 卷 寫

首に撰集の大體につき作者歌詞等を説き、次に後撰より詞花集に至るまで季吟の註をぬき簡単に擧ぐ。何人の作なるを知らず。京都帝國大學に一本あり。

五 代 簡 要

一 卷 寫

細 川 幽 齋

古今以下五代集につきてそのよき歌をぬきて、集めたる幽齋目筆の一本細川侯爵家にあり。彰考館本によれば承元三年定家卿の撰にかかるよし見えたり。

千 載 和 歌 集

二 十 卷

壽永二年後白河院の院宣を奉じ、五條三位俊成の撰する所。假名序あり。その中に『後拾遺集に撰びのこされたる歌、上、正暦の頃より、下、文治の今に至るまでの倭歌を撰び奉るべき仰を蒙り』云々とあり。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、別、旅、哀傷、賀、戀(一より五まで)雜(上中下)短歌、旋頭歌、物名とす。歌數千二百八十五首。奏覽は文治四年なり。叙景の歌ややく多く、歌のさま華麗なること、新古今集の先驅と稱せらる。

千載和歌集校合本 二 卷

明和元年聽雨庵蓮阿の寫し本に、文政九年寂蓮本、永原永運自筆本、古寫本、流布印本、同小本等六本を以て、稿忠實の校合せる本あり。

其

千載集拔書 一 卷寫

智仁親王の拔書せられたる一本、圖書寮にあり。

千載和歌集抄 一 卷

北村季吟

八代集抄の内、卷三十四より卷四十まで。

千載集評 一 卷

服部高保

明和の頃服部高保三十餘歳の時の著にして、もと復古の裏に書きたりしを見出でて書寫す。天保十二年九月市川室雄とあり。始の方數葉は失せたり。

千載集類礎 一 卷

いろは順、第五句の尾字にて歌を引く。

千載集存疑 一 卷

岡本保孝

況齋叢書三十五に收む。紙數織に十三葉。

新古今和歌集 二十 卷

後鳥羽院の仰により、土御門天皇建仁元年源通具、藤原有家、同定家、同家隆、飛鳥井雅經勅を奉じ、同三年撰進す。元文元年竟宴を行はる。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、賀、哀傷、別離、羈旅、戀(一より五まで)雜上中下、神祇、釋教とす。歌數八雲御抄並に拾芥抄には、千九百八十八首、國歌大觀には、尙一首多し。假名序は後京極攝政良經、漢文の序は藤原親經の作。二十一代集中、古今と並び稱せらる。この集は技巧を以て優れたり。拾芥抄に云ふ、披露の後また直され官位相違のことあり云々。近代風體にいふ、新古今ほど面白き集はなし。初心の人にはわろし、心得たる人はこの集を見んこといかで悪しかるべき云々と。烏丸資慶卿の評にいふ。新古今は至極無上にして心も詞もかけたる所なし。あまり事理つまりつまりて廣からず云々と。其の他荷田在滿及本居宣長等はこの集を最も優れたりとせり。又此の書の奥書に異本の歌五首入りたる本あり。これ隱岐に於て改め直させ給へる本にて書目に隱岐本と稱するものなり。隱岐本二十卷二本圖書寮にあり。尙御跋は別に扶桑拾葉集

七九

に収めたり。

六〇

新古今和詞集

四卷寫

撰者の人々が、本集各歌につき、一々頭に點附せし冷泉家の傳本、圖書寮にあり。享保十七年初冬、烏丸光榮の奥書あり。撰者の意向も見えて面白く且世に珍しきものなり。

新古今拔書

一卷

『みよしのは山も霞みて』より西行の『聞はれて心の底にすむ月はまて』の佳歌を明曆帝の拔出し給ひしもの、高松宮家に一本あり。

新古今集聞書

一卷寫

作者並に年代詳ならず。新古今全集の中より然るべき歌を抄出して註せるもの。勅撰名所集を引ききたる所あり。又宗祇招月專順等の説を引ききたる所あり。もと久世家の藏たりしが、今和田英松氏所藏たり。紙數五十六枚。足利末期の寫本かと思ゆ。この古寫本は焼失せり。家藏本はこれに據りて校合せるもの。

新古今集新抄

五卷

一名東野州の新古今聞書といふ。文明二年の日附あり。板本は新古今和歌集抄と外題し四本とす。序あり。作者目錄と歌數とを擧げ、後に慶長二年幽齋奥書あり。群書一覽に四卷抄とあるものと同じ。圖書寮には新古今聞書と外題し、幽齋の補へる古寫本四卷一本なると一卷四本なると兩つあり。

歌 秘 抄

一卷寫

一名を宗長歌秘抄といふ。後京極攝政の『歸る雁いまはの心ありあけに月と花との名こそをしけれ』以下新古今の歌百四十餘首を抜き註す。天正十四年、宣義坊英酒の奥書ある本あり。神宮文庫本は寛永十八年長周自筆の寫なり。

新古今集後抄

一卷

中には新古今聞書とあり。上卷四季下卷戀以下、卷頭三吉野は山もかすみての歌を一部の卷頭に置ける心は一首の内に題號の心を含めり。一五文字よりふりにし里にと云ふに古今の二字をいふなごとあり。跋にこの集略抄前後二冊書寫之今一冊者東野州常縁云々。去年寫之了。此帖別抄也。抑幽齋以彼常縁抄漏脱之歌引、此抄

六一

部分歌次第等任本集加用捨被爲二冊。予有書寫之志。彼一冊已以所持之間被追加之分書拔爲別帖。仍二冊之略抄註前後者也。若於得閑暇時者、引合可爲一抄耳。于時慶長第二丁酉仲冬初之日（猶幽齋抄出之奥書追而可註加之）。也足子素然四十二歳とある一本高松宮家にあり。

新古今和歌集拔書 一 卷

智仁親王のみづから拔書し給へる一本圖書寮にあり。

古歌御註 一卷 寫

後水尾院

新古今集及順徳院御集等の歌十二首を註釋評論せられしもの。

新古今和歌不審問答 一卷 寫

徳川氏の初に、公卿の人々が、烏子の料紙に新古今集を筆せる本あり。これに問と答とを所々朱書せるもの。靜嘉堂文庫にあるは、巻頭の「御吉野は山もかすみて」の歌より「明日よりは志賀の花園稀にだに」の歌までにて、青木信實の説によれば、この書の十五葉以下の寫しは飛鳥井雅章の筆といへり。

新古今和歌集増抄 四 卷

加藤盤齋

每首宗祇等の古説を挙げ、次に自説を加ふ。寛文二年八月十五日自序あり。翌年板行す。四卷本あり。烏丸資慶卿口授に、「新古今四卷抄よし磐齋が増抄も苦しからず」云々と見えたり。

新古今和歌集抄

北村季吟

八代集抄の中、卷四十一より卷五十まで。

美濃家苞 五 卷

本居宣長

門人美濃の大矢重門が爲に、新古今集中元久頃の歌六百餘首を評釋せるもの。寛政三年加藤磯足、秦鼎及大矢重門の序あり。同六年上刻。附録美濃家苞折添は同九年上木。本居全集にも收む。

美濃家苞難 一卷 寫

村田春海

本居宣長が、新古今集を評釋せる美濃家苞の説のあたざるもののみを駁せるもの。錦織舍隨筆中にも收められたり、又別本となせるもあり。

尾張の家苞 九 卷

石原正明

本居翁の美濃家苞の説を評騭して、新古今の歌を解釋せるもの。書名は甥の正俊が尾張に歸るに贈れるより、その名に負せたり。端書に新古今のめてたきことを述べ、本居翁は草庵體に執し、掛合などに泥みて評せるは、鹽水を以て四大海潮を論ずるが如しなど排撃せり。併し美濃家苞によきところもあり。兩書相照して見るべし。文政二年上木。石原正俊の序あり。五卷九冊とす。

みをつくし 五 卷 寫

作者并に年代を詳にせず。美濃家苞と尾張家苞と兩説をあげ、批評を下したるものにて見るべき説多し。四季の部のみにて五冊あり。全部幾卷なるを知らず。内二の卷開けたり。家藏本。

新古今集もろかづら 一 卷 寫

市岡猛彦

新古今の歌二百を抜き類題となし、所々註を加ふ。歌は元久の頃のみに限らず。人麿赤人のも取りたること、千葉葛野がいへるが如し。鈴木春蔭の序あり。文政八年上木。◇猛彦は尾張の藩士にして榭園又稚垣内といふ。鈴屋翁の門下。文政十年歿す。

をられぬ水 三 卷 寫

大鐘清風

美濃家苞及尾張家苞の中、説明不可と見ゆる歌を抜き、簡單に評釋せり。その子久樹の天保六年彌生の序あり。著者の端書に省略餘韻等より、一方をいひて他を思はせ、心なきものに心あるやうにいひ、物をことごとくいひて意を深め、若しくは句を次第して心得べきことなどを説けり。學習院に久樹の自筆本あり。◇清風は名古屋の人。本居春庭に學び千葉葛野と友とし善し。文化文政の頃の人。

新古今集渚の玉 一 卷 寫

衣川長秋

新古今集中の佳歌を抜き註を加へたるもの。◇長秋は伊勢の人、通稱宰記、鳥取侯に仕ふ。瓊齋と號す。鈴屋の門人。明和二年に生れ、文政五年に歿す。百人一首峰の梯等を著す。

詠歌眼目 一 卷

西田直養

新古今集中秀てたる歌二百三十餘首を抜き、升堂篇と入室篇とに分ち、前者を、道理體、花麗體に、後者を、幽玄體と餘情體とに分ち、歌を擧げたるもの。本居大平及様子の序を加へて上板。

建久十人百首 一 卷

千葉葛野

新古今作家中の名家、太上天皇、式子内親王、攝政太政大臣、俊成、宮内卿、家隆、有家、定家、西行、寂蓮の歌を、各百首を撰み頭註を加へたり。始にその師春庭の説を擧げ、初學妄に之を學ぶべからずといひ、又春海の説を難じて本居氏の爲に辯す。嘉永三年成る。◇葛野は信州飯田の人、葛の舎又樞園と號す。植松有信父子に就き後本居春庭の門人となる。寛政十三年に生れ、安政二年に歿す。年五十六。

科野の家づと

千葉葛野

建久十人百首に同じ。

新古今和歌集書入 四 卷

水野忠精

承應三年版の新古今集に口語體の註を書き加へたるもの子爵水野忠欵氏所藏。◇忠精は山形侯、越前守忠邦の子、從四位下待從となり、老中を勤む。

美濃尾張家苞評 一 卷 寫

飯田年平

新古今集の注釋美濃尾張兩家苞の中、藤原秀能の花ぞ見る以下五十首につきて批評せるもの。

美濃尾張家苞くらべ 二 卷

林重義

明治三十五年十一月、新古今集の註釋たる二つの註釋を擧げて批評せるもの。

新古今集詳解 七 卷

鹽井正男

第一卷は三十年十一月に、第二卷は三十三年十一月に、第三卷は三十六年二月に、第四卷は三十七年十一月に、第五卷は四十年十月に、第六卷は四十年十一月に、第七卷は四十一年三月に、前後十二年を要して完成せるもの。每首語解意解に分ち、意解に於ては歌の背景をも説きたり。蓋しこの集の註釋としては最も整へるもの。後合本となす。改版本には作者傳及類句索引を附す。大正十四年版には大町桂月の序を加へたり。◇正男は但馬豊岡の人明治廿八年東大を出づ。雨江と號す。女子大學及奈良女子高等師範學校教授となり、大正二年歿す年四十五。

新古今集註解 一 卷

飯田永夫

明治三十九年出版。

新古今集遠鏡 一 卷

鴻巢盛廣

首に新古今集に對する概説を擧げ、以下本居宣長の古今集選鏡の如く口語文を用ひて平易に解釋す。本文は季吟の八代集抄本を基として流布二十一代集本を參考として補訂すといへり。明治四十一年博文館より發行す。

新古今類礎 三卷

類礎の部を見よ。正徳五年の奥書本あり。

美濃家苞折添 三卷

本居宣長

美濃家苞の附録にて、上卷は新勅選の歌を抜きて辨難す。中には契沖の新勅選計をも難じたる所あり。中卷は續古今以下續千載まで五代集につき、下卷は風雅以下の勅選集につき歌を少しづつ抜きて難じたり。その成りしは寛政三年にて、同九年上板。

美濃家づと折添疑問 一卷

柴田常昭及稻掛太平が寛政三年本居翁の説に對し不審の條々を書き出でたるに、師の更に評を書き入れたる一本松井簡治氏所藏。

新古今七十二首秘歌口訣 一卷 寫

有賀長收自筆本あり。

二四代集 一卷

藤原定家

春(上下)夏、秋(上下)冬、賀、哀悵、離別、羈旅の部立を設け、古今より新古今に至る八代集中の佳歌を抄出せるもの。もと八代集抄といひしを改稱せるなり。寫本二十卷一本なるあり。二本なるあり。十本なるあり。安永四年の刊本は一冊とす。歌數千七百九十一首。

八代集 八卷

八代集百四十卷、九千四百八十九首を文明八年に牡丹華宵柏の校合せるを正保四年に板行せるもの。八卷本あり、寫本は十一卷本、十四卷本、十五卷本等區々なり。

八代集 十六卷

明暦元年の板本は十六本なり。

八代集秀逸 一卷寫

八代集の秀逸の歌を藤原定家の抄出せしものといふ。歌数多からず。神宮文庫には菊山一惠の寫して奉納せる一本あり。

八代集抄 百八卷

北村季吟

古今より新古今までの歌、九千四百八十九首を註釋す。一名八色抄といふは集毎に表紙の色をかへたるに由るといふ。古今集の部は古抄の義を、他の集は、飛鳥井雅親が將軍義政の爲に顯註勸勤・僻案抄、後成恩寺説を交へて講説せし書に則りて、丁寧に註す。天和二年上板。五十本とす。文政二年經刻本は二十四本。明治三十五年の活版本は、上下二冊とし、勅選作者部類を添へたり。

甘露考 一卷寫

富士谷成胤

古今以下新古今まで八代集の名歌を抜き所々註を加へたるもの、寛政四年に成る。

八代集抄書入 五十卷

清水濱臣

天和版の板本に、古今集を除きて、他の七集に書き入れ校合せし濱臣の自筆本。井上頼園氏所藏す。

八代集和歌全彙類 十二卷寫

田澤千卿

古今六帖に倣ひ、八代集の全歌を分類せるもの。古河の小出翠庵の序あり。上田萬年氏一本を藏す。

八代集戀類抄 一卷寫

杜戀をよめる後撰集所載の在原元方の詠以下、『玉寫いまは絶ゆとや吹風の音にも人の聞えざるらん』まで八代集中のむつかしき戀歌をぬき出でたるもの、墨附三十四枚、高松宮家に一本あり。

八代集中てには 一卷寫

飛鳥井雅俊

力のや、かへるかな、哉の歎、疑のか、休めのか、かへ字のか等八代集中の主要のてにはを取り歌を引きて撰す。霜傑亭叢書に收む。又元禄十六年龍原寺知足老和尚の奥書あり。

新勅選和歌集 二十卷

後堀河院の貞永元年、前中納言定家卿勅を奉じ撰む所。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、賀、禊、神祇、

釋教、戀（一より五まで）雜（一より五まで）とす。奏覽は天福二年。歌數拾芥抄には千三百七十五首。質實の歌を撰びたりとて當流には歌の教本となせり。定家の自筆本二冊道通院實隆の添狀と共に細川侯爵家にあり。

新勅選和歌集疑問 一卷寫

卷首より釋教の部の御封のといふ語まで、和歌及語の不審を質したるもの。元祿壬午初應_レ需書寫之。と奥書ある生々翁自筆の本あり。

新勅選評 二卷寫

契 冲

一名難勅選、又新勅選難註、又新勅選斥非ともいふ。集中一節ある歌を抜き、本歌を考へ、等類の歌を挙げ難註を加ふ。元祿十二年五月二十六日草_レ之竟。攝之江南沙門契冲と奥付あり。圓珠庵には、阿闍梨の自筆稿本あり。京都帝國大學には前波默軒の自筆本あり。圖書寮の新勅選評には一名宇治川集と題したり。

新勅選抄 二十卷寫

堯 眞

一部の註釋なり。堯眞は梅月堂宣阿の法名なり。群書一覽に挙げたれど己未だ管見せず。

新勅選和歌集抄 八卷寫

祖 能

友人神田正業の稿本に、寛政十一年筆を加へたるものにて、季吟の言ひ古したる説を省く旨記せり。又新勅選難註二冊、契冲の作といへるを疑へり。◇著者は弄家軒と號し、烏丸光榮卿の門下たり。

新勅選愚考 一卷寫

黒川 眞頼

集中、式子内親王の「にはの海や霞のをちに」云々の歌以下十首につきて考説を記し、その師春村に示し、に、翁これを賞して上欄に朱書を加へたり。この十説に更に六首の歌を抜き加注せるもの黒川家にあり。嘉永六年の淨書なり。

新勅選類礎 一卷

いろは順、第五句の尾字によりて引く。類礎の部を見よ。

贈答部類 四卷寫

古今より新勅選に至る九集の贈答の歌をぬき、一卷に四季、二卷に戀、三卷に雜、四卷に別處、哀傷、賀と部な

分てるもの。神宮文庫に一本あり。

續後撰和歌集 二十卷

後嵯峨院天皇の勅により藤原爲家これを撰び、建長三年十月奏覽を經。二十卷歌數千三百六十八首。春、夏、秋、冬、神祇、釋教、戀、雜、羈旅に分つ、平明なる姿の歌多し。當流にては衣冠正しき人を見る趣ありなどと過稱せり。

三集私抄 上下二卷寫

千載集新勅撰集續後撰集三集より然るべき歌を抜き、上卷には四季、下卷には戀雜の歌を收む。上卷に千載より二百四十五首、新勅撰より三百十七首、續後撰より四百十三首、下卷には千載三百四十六首、新勅撰四百十五首、續後撰三百八十四首を抄出編次せるもの。高松宮家に一本あり。

九代集 一卷

肖 柏

後撰集より續後撰に至る九代集より佳歌をぬきたるもの。文龜三年に成る。歌數千五百首。奥書にいふ。右一册從後撰至續後撰、拾遺、眼銘、肝之作、書者一千五百首號九代集也。送春鐘盡秋漏而閑窓勅之爲老懶之難堪傳覽又思童蒙之不深折耳。文龜第三曆孟冬下旬弄花軒肖柏牡丹也とあり。

九代抄 一卷寫

宗 祇

後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞華、千載、新古今、新勅撰、續後撰以上九代の集より肖柏の抄出せる千五百首に注を加へたるもの。一卷五本とあり。

九六新註 一卷寫

松 永 貞 徳

上の九代集に中古六家集即ち長秋詠草、山家集、月清集、壬二集、拾遺愚草、拾玉集の歌をぬき歌毎に注釋せるもの。群書一覽には作者牡丹華肖柏とも中院通村公ともいふと擧げたり。彰考館に二部あり。但し外題は九六古新注とあり。

十代集

後撰より拾遺、後拾遺、金葉、詞華、千載、新古今、新勅撰、續後撰集、續古今和歌集をいふ。

十代集拔書 二卷寫

後撰より續古今まで十代集の中、佳歌六百二十二首を抜く。神宮文庫本は堀河兩度百首より一千六十三首を抄出

したるものを下巻とせり。連歌師宗養の奥書によれば、此の十代集并堀河二代之抄出種玉庵宗祇禪閣爲連歌士
附合之便或爲詞或爲識難儀抄出給者也。云々と記し、宗祇の作とせり。

十一代集 十八卷寫

古今集に續古今を加へたるもの。圖書寮に古寫本あり。

家の三代集

二條家にては、千載、新勅選、續後撰集を家の三代集といふ。

續古今和歌集

二十卷

龜山院正元年藤原爲家に撰集の仰ありしが、後更に四人を加へらる。その中衣笠内府家長は半らにして薨せしかば、他の四人即ち、内大臣基家、前大納言爲家、侍行家、光俊奉撰し文永二年奏覽を經。兩序あり。假名序は内大臣基家、漢文序は長成卿にて、部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、神祇、釋教、離別、羈旅、戀(一より五に至る)哀傷、雜(上下)賀とす。歌數は拾芥抄に千九百七十二首といへど國歌大觀には千九百二十五首あり。

續拾遺和歌集

廿卷

後宇多院建治二年、龜山院の院宣によりて、前權大納言二條爲氏勅を奉じて撰す。弘安元年十二月奏覽す。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、雜春、雜秋、羈旅、賀、戀(一より五まで)雜(上中下)釋教、神祇とす。歌數は拾芥抄には千六百首とあれど國歌大觀には千四百六十一首あり。

五代集

二卷寫

普通に言ふ五代集と異り、新勅選、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰五代の歌を抄出せるもの。圖書寮に一本あり。

新後撰和歌集

二十卷

後二條院正安三年、後宇多院の院宣により二條爲世之を撰し嘉元二年十二月奏覽す。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、離別、羈旅、釋教、神祇、戀(一より六に至る)雜(上中下)賀とす。歌數拾芥抄には千九百七十首とあれど、國歌大觀には千六百六首。異本井蛙抄及榻嶋隨筆などにこの集津の國住吉の神官の詠を比較的多く取りたるを以て津守集と惡評を立てしことをいへり。

玉葉和歌集 二十卷

花園院正和二年、伏見院の勅に依りて京極大納言爲兼上古以來十三代集の外の歌より當代までの歌を撰す。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、賀、旅、戀(一より五まで)釋教神祇とす。歌數拾芥抄には二千八百三首とあれど國歌大觀には二千七百八十七首にて十六首少し。二條家にてはこの集を異端の如く見做し風體惡しとて斥けたれど、新しき試の作ありて、今日より見れば二條家の人々の撰より面白き歌あり。

歌苑連署事書 一 卷

玉葉集を難じたるもの。歌學の部を見よ。難玉葉集といふ書、類聚名物考に擧げたれど、この書と同じきか否かを知らず。

自得和歌集 三卷 寫

松平定信

玉葉風雅二集中より珍しき歌を抄出せるもの。自筆本子爵松平定昭氏藏す。

續千載和歌集 二十卷

後宇多院の宣により、二條爲世これを撰す。奉勅奏覽の年月に關しては、諸書一定せず。増鏡によれば、後醍醐天皇元應二年奏覽とあり。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、雜體、釋旅、神祇、釋教、戀(一より五まで)雜(上中下)哀傷、賀とす。歌數拾芥抄には二千二百二十首とあれど、國歌大觀には二千五百五十九首あり。耳袋記に爲世卿千載新勅撰の中をとりてこの集を撰ぶといへり。

續後拾遺和歌集 二十卷

後醍醐天皇元中元年、二條爲藤勅を奉じて撰せる中薨ぜしかば、その子爲定繼ぎて功を終へ、正中二年奏覽す。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、物名、離別、釋旅、賀、戀(一より五まで)雜(上中下)釋教、神祇とす。歌數は本によりて異同あり。拾芥抄には千三百四十三首とあり。國歌大觀には千三百四十七首を載す。◇民部卿爲藤は爲世の子、建治元年に生れ、正中元年薨す。年五十。

二八要鈔 二 卷

古今集より續後拾遺集まで十六代の歌を抄出せるもの。尙類題の部を見よ。

風雅和歌集 二十卷

花園院の欽撰にかり、貞和二年竟宴行はれし由勅選次第に見ゆ。假名序あり。部立は春(上中下)夏、秋(上中下)冬、旅、戀(一より五まで)雜(上中下)釋教、神祇、賀とす。歌數拾芥抄には二千二百十首國歌大觀には二千二百一首。京極爲兼の教を受けさせ給へば、玉葉集と共に異體として斥けられたり。三光院の説に集の中に風體悪きは風雅集、歌の悪きは玉葉集云々と。されど二條家の宗匠の撰める勅撰集と異りて面白き作もあり。

風雅集三曙四雪之口訣 一卷 寫

河瀬菅雄

風雅集所載の後京極攝政以下の三の曙の歌、飛鳥井雅孝以下の四雪の歌を擧げ、心優に詞もやさしくいひ廻したる秀逸なる由を説く。享保六辛丑年六月醉露堂菅雄の傳授せるもの。神宮文庫に一本あり。

新千載和歌抄

二十卷

後光嚴院の延文三年、二條爲定勅を奉じて撰す。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、離別、釋旅、釋教、慶賀、戀(一より五まで)雜(上中下)哀傷、神祇とす。歌數群書一覽には二千三百五十八首、國歌大觀には、二千三百六十四首。奏覽は延文四年四月。三光院の説にこの集は歌よりも詞書面白しと。◇爲定は爲道の子、大納言從二位、正應元年生れ延文五年薨す。年七十三。

新葉和歌集

二十卷

後龜山院の御宇、宗良親王の私に撰まるる所、元弘以降南朝の人々の歌を載す。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、離別、釋旅、神祇、釋教、戀(一より五まで)雜(上中下)哀傷、賀とす。歌數國歌大觀には千四百二十首あり。後繪旨ありて勅選に擬せらる。弘和元年十二月奏覽の由親王御作の假名序に見ゆ。承應二年一樂軒永治板本は大本四冊あり。寛文二年版は一卷、寶曆元年刊本は四卷。明治四十四年の活版本は一卷なり。親王の傳は李花集の部に出す。

新葉集作者部類

作家の部を見よ

頭註新葉和歌集

一卷

村上忠順

諸書を引きて集中に見ゆる人物地理を考證し類似の歌を頭註す。著者の没して後嗣子忠淨魚住長胤に謀り、明治二十五年活字に上す。忠淨の跋あり。稽照堂より發行す。

新拾遺和歌集

二十卷

後光嚴院の貞治二年、二條爲明奉撰中卒去したれば、頼阿法師後をうけて功を終ふ。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、賀、雜別、釋旅、哀傷、戀(一より五まで)神祇、釋教、雜(上中下)とす。歌數、國歌大觀には千九百二十首。◇爲明は爲藤の子、民部卿に至る。永仁三年に生れ、貞治三年薨す。年七十。

新後拾遺和歌集 二十卷

後醍醐院永和元年、二條爲遠勅を奉じて撰する中、頓死せるを以て、永徳二年爲重に仰せて後を繼がしむ。翌三年成る。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、雜春、雜秋、雜別、釋旅、戀(一より五まで)雜(上下)釋教、神祇、慶賀とす。歌數千五百五十四首。群書一覽には千五百四十八首とあり。二條良基の假名序あり。◇爲遠は爲定の子、官從二位大納言、康永元年に生れ永徳元年薨す。◇爲重は爲冬の子、權中納言に至る。正中二年に生れ、元中二年薨す。年六十一。

新續古今和歌集 二十卷

後花園院永享五年、飛鳥井雅世勅を奉じ六年の星霜を重ね同十一年撰成る。上は萬葉時代より永徳の比までの歌をとる。部立は春(上下)夏、秋(上下)冬、賀、釋教、雜別、釋旅、戀(一より五まで)哀傷、雜(上中下)神祇とす。歌數二千百四十四首。眞名假名兩序あり。共に一條兼良公の作。末の世の集にて面白きは新續古今と

三光院の説あれど優しき作多し。◇雅世は雅縁の子、正二位權大納言に昇る。元中六年に生れ寶徳四年薨す。年六十四。

津々留歌 二卷寫

古今より新續古今に至る勅選集よりつづいて留りたる歌を集の次第に抄き集めたるもの。上卷は古今より續後撰に至り、下卷は續古今より新續古今に至る。圖書寮本高松宮本共に同じ。

十三代集

新勅選、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の十三の勅選を合刻せるもの。又別に古今より新後撰まで十三代集ともいへること拾芥抄に見ゆ。

十三代集略下

契沖自筆本半紙形九十枚。上卷の所在明ならず。續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新後拾遺、新續古今、新勅撰等の歌を抄せり。元祿四年正月十一日寫之了とあり。

十二代集作者

一卷寫

圖書寮に一本あり。後撰集より新後撰までの作者中、よみにくきを抜書して假名を付く。草稿なり。作者誰なるかを知らず。

圖書寮古寫本二十一代集 四十八卷寫

二十一代集古寫本。裝訂など極めて美なり。なほ傳によればその筆者は次の如し。春一より四まで平松三位、春五より夏二まで藤井三位、夏三より秋三まで北路三位、秋四より冬一まで梅園三位、冬二より戀一まで穂波左京大夫、戀二より戀四まで裏松少將、戀五より雜五まで長谷美濃權介、雜三より五まで千種侍從、同六より公事終まで六條侍從筆の本圖書寮にあり。

博物館本二十一代集 四十三卷

古今、後撰、詞華、續後撰、續後拾遺、新拾遺は今城定經卿、拾遺、後拾遺、新續古今は西園寺致季卿、金葉、新古今、新勅選、新後撰、續千載は中院通茂公、千載、新千載は飛鳥井雅豐卿、續古今後拾遺、玉葉、風雅は東園基景の筆なり。

二十一代集

五十六卷

古今より新續古今までの中、新葉集を除きたるもの。正保四年板本あり。四百卷五十六冊あり。大本は契沖の校正して翻刻する所、別に小本あり。圖書寮には二十七卷本、三十六卷本、三十九卷本、四十八卷本等あり。

二十一代集書入

八卷

木村定良新見正路書入、拾遺後拾遺、金葉詞華千載の五部のみ松井簡治氏所藏。

二十二代集

新續古今の序に見えたる二十一代集に、新葉集を加へたるもの。この稱は水戸黄門光圀の説に始る。

代々集和歌序

一卷寫

代々集部立

一卷寫

代々集卷頭歌

一卷寫

代々詩歌同日例

一卷寫

圖書寮にあり。いづれも勅選二十一代集につき、抜きて集めたるもの。中に部立の部には、飛鳥井雅世の奥書あり。その成りし時代を察すべし。

秀次公二十一代集跋 一 卷 寫

二十一代集の跋を、豊臣秀次が古寫本より切り取り、順次に集めたるもの。天正十五年の奥付あり。これが寫本稀に存す。

卷頭和歌集 三 卷

二十一代集の卷頭の歌を集めたるもの。享保五年成る。遠山北湖の作か。

二十一代集分類 五十 卷 寫

古今より新續古今まで、二十一代集を、部立の順により集毎に春は春と並べ夏は夏と叙てたるもの。

二十一代集拔書 五 卷 寫

古今後撰拾遺千載新古今等につきての拔書、圖書寮に一本あり。

智仁親王

代々集 一 卷

二十一代集中漢文の序卷頭の歌を擧げ、次に歌仙の装束抄を載せ、次に公卿補任などを引きて歌仙の傳を記したるもの。高松宮家に一本あり。

二十一代集撰者并沙汰 一 卷 寫

中院通勝

萬葉と二十一代集の成りし帝の代、年代、撰者、歌數、序、諸説を擧げ。末に右一册中院也足軒製作也。則以自筆之本書寫之、尤可爲證本者也。と慶長元年季秋上旬且齋宗佐より二傳本即元文六年湯河宗固の寫本神宮文庫にあり。圖書寮にも一本あり。

二十一代集大臣家名乘 一 卷 寫

萬葉以下二十一代集の撰者年代を説き卷頭の歌と集の歌數とを擧げ、次に大臣名を掲げ、小註傳を加ふ。圖書寮本。

大臣作者部類 一 卷 寫

八二
二十一代集に見えたる大臣の人々を撰集の順に擧げたるもの。勸思堂村井敬義が安永八年亥年二月下旬一校了本。神宮文庫にあり。

隱名作者次第 一卷寫

永正六年の奥書ある一本黒川眞道氏藏す。

二十一代集拔萃伊勢神宮作者 一卷寫

首に作者二十一人の小傳を掲げ、次に歌を載す。御裳濯和歌集により千載集にのれる詠人知らずの歌二首をも收めたり。神宮文庫に一本あり。

二十一代集後談 一卷寫

親阿

勸選二十一代集につき、奉勅、歌評、序、歌數、卷頭、卷軸、撰者歌數につきて説明し、終に二十一代集歌員多き人名録を添へたり。天和三年の奥付あり。

二十一代集を知る長歌 一卷寫

靈元天皇

七五調にて俗話を交へ二十一代集を記憶し易きやうに作らせられしもの。神宮文庫本。

二十一代集概覽 一卷寫

慈延

勸撰集の歌數、撰奏、撰者の略傳、集の批評、集の名の起る所以を古今より新續古今まで二十一代集の順次に従ひ、諸書の説を輯めたるもの。終に觀阿居士の歌人先達の一條を加へたり。

見勅撰脱家集歌 一卷寫

源通雄

名の如く、勸選集に見えて家集にぬけたる歌、七十九首を集む。明和八年の奥書あり。

二十一代集秀歌分類 一卷寫

賀茂眞淵

二十一代集中の秀歌を、いろは順に各集の順に列ねたるもの。眞淵の撰とあれど、後世の歌を賤める氏の作としてはいかがあらん。

歴代和歌勸選考 五卷

吉田令世

萬葉以下勸選二十一代集の、時代、撰者、卷數、歌數、部立、卷頭、卷軸の歌を擧げ、歌詞その他撰述に附帯し

起りたることなどを明にし、末の巻には、和歌師資、師傳地儀秘事、古今傳授、撰和歌所、撰集故實、勅撰盛知、衰運等のことを説く。天保十五年の自序あり。存採叢書に收む。

三、私撰集 總説

勅撰に對して私撰の生ずべきは自然の理なり。否勅撰に先ちて私撰はまづ成りしなり。萬葉集に引ける類聚歌林などこれが證たり。されど古きものは夙く佚し、新しきもの、中にも、世に傳らずなりしもの多かるべし。

貫之の新撰和歌集、公任の金玉集の如き、勅撰集中の優れたる歌を抜きたるものにて、その體裁も四季戀雜等全く前者に異らず。能因の立々集もその類なれど、後年顯輔の詞華集を撰するに方り、多くその歌を取られたるは前二書と其の趣を等しうせず。

これ等と撰を異にするを古今六帖とす。その時代撰者に關して異説もあれど、内容によるに、後撰時代を去ること遠からず。その部門は四季戀雜の別によらて、歳事地儀等二十五部百餘項に分てり。之を六帖となづくるは唐の白孔の六帖に擬するが故なり。後建長の始に現存六帖成り、寛元に新撰六帖成る。又關東にては東撰六帖成る。この三つはこれを粉本とせるなり。六帖は廣く各種の部門に亘りて、多く集められたれば、必しも秀歌を取らず。特に傳寫の誤多ければ、後世捨て、顧みざりしを、契沖出て、大にこれを表彰し、盧庭繼いてこれを尊崇せり。斯くて後にはこれが類苑、注釋、類句の類をも生ずるに至れり。

清輔の續詞華集の如き、奏覽に至らて私撰となれるもの。その體裁は知るべし。六帖以降の私撰集は大抵或る

時代を限り、その間の作者の歌を抄出せるものにて、天曆より保元以前のものに御裳濯和歌集あり、後葉集あり、平家の頃には、月詣集、萬代集、今撰集あり。鎌倉の始には玄玉集あり。それに亞ぎて秋風抄あり、雲葉集あり、檜葉和歌集あり。中に玄玉のみは、神祇、天地、時節、草樹、釋教の如き分類を用ひたれど、他は皆勅撰の部立に準ぜり。以上の中御裳濯集の伊勢に關する人々の作を集めたるも、月詣集が賀茂社に月參して奉納せると、檜葉集が奈良の春日の宮に奉仕せるもしくはその地方の人の詠を收めたるも、その性質を異にす。月詣集は後世の奉納和歌の嚆矢と見るべく、御裳濯集及檜葉集は地方の集の濫觴とすべし。而してこれらの集は皇室に重大なる關繫を有する神宮及大祠を中心に成りたることも注意すべし。但し宮司禰宜などの人々の作にして、特にその境地背景の色彩濃厚にあらはれざるは遺憾といふべし。

佛法の興隆につれ、文字ある一大社會をなせる僧侶の作のみを集めたる門葉集は、文治中に成りたれど今傳らず。これらは佛教臭味の歌多きは云ふ迄もなけれど、勅撰と部立を同じくし、僧侶にはいかかと覺ゆる後朝戀などの歌も々からず。念珠爪ぐり、櫛を摘みて阿伽を奉る編徒の境遇、織ゆるが如き情熱を轉じて死灰の如き冷靜にうつる作者の境遇感情の見はれざるは、題詠に引かれ、勅撰に倣ひたるの結果なるべし。

藤原定家は歌學者にして兼ねて歌人たりしが故に、二たび勅撰の撰者となりしのみならず、又古集を抄し撰集を抄して撰集をなせり。三代集の歌の優れたるを抄して秀歌の體大略を作り、八代集の佳歌を抄して八代集秀逸を作り、古今の一人一首をぬきては百人一首を作る。この風は鎌倉末期より南北朝へかけては摸倣者を出せり。

即ち千載集新勅撰後撰三集の佳歌をぬきたるものには正風抄あり、古今以下八代集、玉葉集までの歌をぬきたるものには閑古抄あり、古今より續後拾遺集までの歌を抄したるものには二八要鈔あり。嘗ては新撰和歌や金玉集の如く一集の秀歌を抜きたるが、この時代に至りては數集を通じてその佳歌を抽くに至りしなり。これと同じに當時の人々の詠を打開きとして、部目によりて集むることも行はれたるなり。

この間に尨大なる撰集は見はれたり。それを勝田長清の夫木和歌集とす。一集三十六卷中、上半は四季とし、下半は雜部とし、十八部に分つ。全篇七百項、歌數四萬に餘るべし。勅撰家集歌合等より博く拾採せり。蓋し撰者は後の勅撰の材料とし若しくは歌人の參照に供せむと、汎く搜り多く收めたるものにして、從來勅撰に見ざる題少からず。後の萬葉集との評は中らずとも遠からずといふ類ならむ。されば、夙く抄書あり。詞を引くもの、句を引くもの、地名を引くもの、名歌を抜くもの、故事を解説するもの等、後人のこれに手を着くるものを生じた

り。これと前後して成り、三葉の一に數へられたる風葉和歌集は、古今の物語の歌を勅撰の體に編みたるものにて、他とは趣を異にし、散逸せる古物語を知るに便あり。又自讃歌の如く、建久時代の十七名家の自らよしとせる歌を集めたるあり。こは正風體抄と共に廣く詠まれたるものにて、後幾つかの註釋書成りたり。

雲葉集より後、新和歌、柳風、續現葉、臨水、藤葉、拾遺風體、菊葉、松花、飛月、續撰、續撰吟等の集あり。各時代々々を限りて勅撰の體にならひ、各作家の歌を抜けり。又部立もなくなつた。打聽のまゝの如く記せるものに

は、温知和歌集、金言集、伯母集の如きあり。この類は極めて多かりしならむも應仁の兵火に多くは焼亡せしなるべし。その時代は明瞭ならざれど、撰歌風體抄、中古歌仙入撰集歌等は足利末期或は徳川初期に成りたるなるべし。蓋し勅撰作者部類などの完成と相俟つて成れるに似たり。これと前後して新勅撰以下の十三代集の佳歌をぬきたる摘題和歌集、又十代集以下より戀の歌のみをぬける詞類抄、らりるれろの音を語頭にもてる歌を集めたる希頭和歌集などを生じ、續撰吟抄などの如く、三玉集時代の歌を集めたるものより、轉じて風林新葉和歌集の如き大部の私撰も出づるに至れり。

徳川時代の始に方り斯界の明星たりし細川幽齋は古歌の則るべき歌をぬき、和歌座右を著したれど、こは撰集の體をなさず。そのこれあるは下河邊長流とす。長流は古集を研究しては萬葉以下堀河百首までの歌をぬき、天象地儀等の事項分類法によりて、材林和歌集を著し、同時の人々の歌を集めては林葉累塵集を著す。氏は不羈の資、公に阿るを屑しとせず、位なき武士農夫商人僧侶の歌を撰みて寛文十年に出ししものを累塵集とす。後九年延寶六年にこれが續篇を著す。これを萍水和歌集とす。この二集は後水尾院の欽撰したまひし地方三十六歌仙等と共に大に在野の歌人を崛起せしめしが如し。

水戸光圀卿に聘せられし清水宗川は、正木のかづらを撰し、飛鳥井雅章卿の教を受けし河瀬首雄は、和歌塵の塵を撰す。露家茂睡は和歌鳥跡を撰し、柳蔭堂了壽も、その後撰にとて、新歌さざれ石を撰す。その他了然尼の紫の一本等皆民間歌人の歌を取る。大官仕を辭して大阪に下りし高岡宣慶は難波拾草を著し、主として大阪地方

の門下の歌を撰し、烏丸平廣卿門下の植山梅之は、歌林尾花末を撰み、多く京都方面の人々の歌を取る。又光演の子光雄に従ひし阪靜山は、和歌繼塵集及和歌山水水を撰み、更に門人の歌を集めて、和泉の袖を撰む。豊臣秀三の和歌観今集は、和歌山水水と共に東野州以降の作を取る、亦見るべし。以上は寛文より享保に至る間に成りし集にて、當時民間の人々がいかに斯壇に心を寄せしを知るに足る。

賀茂眞淵が萬葉風を唱道せしは寛延以降のことにして、當時は尙古今調と共に荷田在滿等の主張せる新古今風盛なりき。加藤校直の古今派に對して技巧説を圖はしし松宮觀山は新古今調を好める人々の歌を抜きて和歌渚の松を撰し、これに次いで村上影面は主として古今調の歌を撰す。これを采藻編といふ。冷泉爲村卿の教を受けし石野廣道は大江戸歌人の作を主とし、廣く求めて霞關集を作る。これら三集は多少その趣を異にすれども、まづ當時に於ける精撰の集たりしなるべし。

眞淵以降に於いては萬葉風熾となりたれど、當時は萬葉の佳歌を抄出し一意これに則らむことを努め、古調の家集を出すに止まり、その方面の撰集を出すに至らざりき。眞淵の萬葉新探百首、楳取魚彦の萬葉集千歌、長瀬眞幸の萬葉佳調の如きはその抄書として世に用ひられたるものとす。家集のことは別に述べなければ茲に言はず。雲上に於ては靈元天皇の近代和歌集、某公卿の手に成りし玉々集等その他にも尙これありしかも知らずといへども、地下には全く傳らず。民間に於いては明和安永より寛政文化の間に於いて、古集より撰出したるものには本居宣長の古今撰、清原雄風の類題拾野集、富士谷成壽の百家類葉、加藤景範の實踐和歌集、六人部是香の秀麗

集等あり。中に恰野集及古今選最も世に行はれたり。當時より幕末にかけて知名の歌人は、その門下の集を出すことと、その地方の歌を集むること盛に行はれたり。山室松軒は夙く越前地方の歌を集めて松の下葉を編み、市岡猛彦は尾張人の歌を撰して春風集を出し、羽山蘭子は細江草を編みて遠江地方の知人の作を収め、山本春樹は浪花草を出し、中島廣足は長崎の人々の詠を撰みて瓊浦集を出し、物集高世は葎居集春草集を作りて、豊後を始め西南地方の歌を収め、八田知紀は郡洲集を撰み日向都城あたりの歌人の作を探り、半井梧菴は鄙の手ぶりを撰して伊豫地方を始めその附近の人の詠をぬき、藤井高雅は類題吉備歌集を編み、藤井高澄は類題眞金集を出して三備地方の社中の歌を探る。中島宜門は稻葉集を出し、因伯歌人の歌をぬき、堀田清厚は土佐人の歌を探りて千船集を著し、西田維恒は三熊野集を出し、竹尾光久は類題三河歌集を撰し、仲田顯忠は武蔵野集を出し、神山魚貫は上總下總等の門人の歌を集めて麻葉和歌集を撰し、朝比奈泰吉は常陸地方の人の作を集めて衣手集を出す。これらの類題集を擧ぐれば尙多々あるべし。尙門人の集に就きていへば本居春庭は門の落葉を出し、井上文雄は摘英集、鶴調集等を探み、作林光平は垣内摘草を出し、八田知紀は小門の汐干を撰せるが如し。

古學派の人々の詠をぬきたるものには紅塵和歌集類題草野和歌集あり。中に草野集最も廣く用ひられたり。長歌を撰したるものには清水濱臣の近葉音根集あり、蓋し精撰のものといふべし。その他本居大平の撰める八十浦の玉には眞淵門下及鈴門の人々の詠を集め、源辰行の明教館草本には眞淵、蒼生子、春海、千蔭、きよい子の歌をぬき、長谷川音緒の編める奴豆乃舍集も亦その同人の作を集む。又野口正武の撰びたる近世八家歌集には長流

契沖、眞淵、千蔭、宣長、成章、蘆庵、景樹の歌を抜き、白蓮の月代和歌集には契沖、眞淵、宣長、蘆庵、景樹の詠を撰みたればそれらの集も亦参考とすべし。

又霞園集などの後を承けて一派一地方に限らて、近世の作を廣く採りたるものには天野政徳の草縁集、鈴木重胤の近世名家歌集、蜂屋光世の大江戸倭歌集あり。これらも亦世に行はれたり。されどいづれも集大成せるものはこれあらず。

以上の諸集と趣を異にするものには、近藤守重の將軍家及その庶流後宮の詠を人によりて集めたる不盡の煙あり。權太泰從の古來の武林の詠を時代によりて分ち撰みたる武林秀調あり。吉田令世が五倫文武等の儒學的見地に基づき古歌を撰みたる新採和歌集及水瀧の明倫歌集の如きあり。伊形賢が四民の部類によりて類聚せむとて農民に關する肥後人の歌を集めたる民草ぶりあり。檢校千歳一の盲人の歌のみを撰める雨夜のなごりあり。これらは多少特色の存する集と謂ふべし。

明治の御代に至りては、御歌所を置かれ、斯道に秀てたる人は文學御用掛などに召され、歌道復興の道次第に開かれたれど、維新當初より西南役以前までは撰集などもさまで出てざりき。

橘守部の姪にして家學を繼ぎたる登世子は明治歌集を出し、その嗣子道守その後を承け、明治二十三年に至るまでに第八編を出したり。されどその歌は當時顯官の詠にあらざればその権がもとの歌苑に因みある人の作に限られたるが如し。諸事更新の聲に和せられて、大陽曆、紀元節、電信、鐵道などの新題は切りに諷詠せらる。こ

、に於てか大久保忠保の開化新題歌事は撰まれ、加藤公阿の明治新題、佐々木弘綱の明治開化新題集の類も一時世に行はれたり。されど新題は新しき器に盛ることもなく、蒸汽車をむしけるまなど和して詠むが如き類多く暫くにしてその風姿情味の乏しきを知り、昔ながらに立ちかへらむとする傾向を生じたり。近藤芳樹が類題月波集を作り、黒田清綱が詠のしぶきを撰み、毛利千秋が聯玉和歌近代集を編み、彈舜平が類題秋草集を出したるが如き、やゝ古き集より近世歌人の作を採りたる類題私撰の集も四つ五つは出てたれど、多く明治以降の歌を撰ぶ傾向を生じたり。即ち根岸千引の新選名家歌集、大野定子の千題千首、明治歌集、拜柳運西の明治類題桑の若葉、平野春躬の明治佳調、佐々木弘綱の千代田歌集、諏訪忠元の皇風集、佐々木信綱の明治歌集、石川正作の明治才媛歌集、某氏の明治勅題歌集、矢島作郎等の昭代集等出づるに至れり。中に蒐集のつとめたるは千代田歌集等なるべく、清撰せられたるは昭代集などなるべし。これらの歌人の中より明治三十六歌仙、明治現存續三十六歌仙、東京大家十四家集などの撰も出てたれど、これも必ずしも斯壇の大家を網羅して撰みたりと云ふべからず。

久我建通侯を會長とせる邦光會、京都華族間の歌會たる向陽社、國學家の組織せる大八洲學會、小出榮、井上通泰、佐々木信綱等の組織せる常盤會等の諸會にては月次集或は會集などを出版せるあり。これらは清撰のものならねど、その會員の中歌才の秀てたるもの多きにつれてその集の尊ばるるもの固よりなりとす。又私人の歌を以て立てるものはその門下の集を出せるものもあり。伊達千廣の夕日岡月次集の如き、松浦詮の蓬園月次集の如き、佐々木弘綱の竹柏園集の如き、黒田清綱の庭の摘草の如き類も少からず。

以上と異りて一地方の歌の撰集も盛に起りたり。今その成撰の年次を追うてこれを擧げむに、堀田清孝は千船集を著して土佐の洲崎地方の人々の詠を收め、猿渡容盛は新竹集を撰みて武蔵相模の人の詠を載せ、朝比奈泰彦は類題明治歌集を撰みて常陸人の歌を採り、高橋富兄は石川歌集を著し、服部春樹は篠並集を出し、小川清流は會津人の歌を撰みて梅木抄を編み、岡吉胤はその郷國伊勢の歌をぬきて勢海集を出し、江幡澁園は秋田歌集を、下田吉蔭は肥後人の歌を採りて鏡池集を出し、上妻宗武は種子島の人々の詠を集めて熊毛集を出し、石丸忠胤は越後歌集を公にす。砂川雄健は姫路の人々の歌を蒐めて明治響洋歌集を撰み、池袋清風は京都地方及其の郷國薩摩の人々の詠をぬきて淺瀬の波を出し、進藤泰世は因伯の歌を集めて蜻蛉集を撰す。江幡通理は秋田の歌を集めて款冬の加吉葉を出し、渡邊雄治は會津根集を撰み、橋本信房は津の歌人百人を撰みて草蔭和歌集を出したり。その他名古屋に於けるあゆちかた、松浦に於けるまつらのよりの類少からず。

この他國家の慶事にあたり成りたる三四の集、また日清日露の大戦役にあたり人々の忠勇愛國の精神を歌ひたる集、例へば山櫻集、忠烈歌集、征露歌集の如き類も出てたれど、いづれも精撰のものならず、尙率納集、獻詠集等の類も多かれど今一々擧げず。

書目解題

撰集の部

新撰和歌集 二卷

紀貫之

延喜御門の勅により、延長八年今古集中の名歌三百六十首を抜き、四軸となせるもの。春は萩と對し、夏は冬と對し、賀と哀とは戀と雜に對し、各二首づつ相並べたり。漢文の自序あり。中に抽_テ始自弘仁至于延長、詞人之作花實相兼而已。今所_レ撰立之又玄也云々とあり。こゝに始といふは古今集を指し、今といふはこの集を指したるなるべし。元祿八年京都橋屋庄三郎上板。類從卷一五九にも收む。

新撰 貫之髓腦 一卷

同

前書と内容全く相同じ。元祿十一年外題を上記の如くに改め、大阪村田庄右衛門板行す。伴直方が此書と類從本とを校合せる天保十一年奥書本あり。松井簡治氏藏す。

拾遺和歌抄 十卷

一名拾遺抄ともいふ。拾遺集の名歌五百九十四首を抜き、四季戀雜十卷とす。編者は花山院とも藤原公任ともい

へど、増保己一は花山院となす。その次第保己一の漢文にて記せる跋文に見ゆ。類從卷一四三に收む。

金玉集 一卷

藤原公任

主として、三代集時代の作家の歌七十八首を撰み、部立をなす。和歌得業生柿本末成撰と變名を用ひたり。古來風體及俊賴口傳、愚問賢註に、この書の評あり参考とすべし。類從卷一五九に收む。

三十六人撰 一卷

同

人麿より始めて、主として延喜天曆頃の名譽歌人三十六家の歌を、三首より十首までを抜く。類從卷一五九に收む。後世これに倣ふもの頗る多し。よりて別に三十六歌仙といふ項を設く。その註釋の書も、その條下を見るべし。

九品和歌 一卷

同

歌學の部を見よ。

歌仙歌集 十五卷

撰集の部

柿本人麿以下中務に至る三十六人歌仙家集なり。正保四年中野道也上坂す。この書藤原公任の輯めしといふ説あれど現存のものは、後人の手に成りたるものなり。契沖の翰筆河社の各人の集に就き評あり。参照すべし。眞淵によれば、荷田春滿の或人に誂へて寫さしめし本は歌數二百七首とあり。中に三十六人に入らぬ在原行平の歌あり。又作者の誤れるもあり。後人の強ひて作りしものあり。群書類從本は歌數三百六十首あり。この集異本多し、中にも本願寺本宜しとす。

歌仙歌集書入

十五卷

正保四年の板本に村田春海の自ら書入れせし本、黒川眞道氏藏す。

本願寺本三十六人家集

三十六帖

美はしき模様ある色紙三十六帖あり。もと官庫に藏せしを後奈良院より本願寺の證如上人に賜ひしもの。正保板本と異る所多し。その色紙といひ、筆跡といひ世の珍とする所なり。

飛鳥井御寫本願寺本

三十四卷寫

奥に三十六人家集者借本願寺光常家珍之本不遺一字令書寫、寛文第十曆仲春とあり。雅章の自寫せる

所。又元祿五年大炊御門經光が飛鳥井本により元祿五年寫せる本あり。

歌仙歌集補

三卷寫

富士谷成章

三十六家集中、缺漏なきもの、素性、清正、是則、順、頼基、友則六集を除き、他は諸本を校合して補ひたるもの。参考には萬治二年詠譽宗連坊の古寫本、天保二年兼氏の奥書本等對照せるよし文中に見ゆ。

歌仙補翼抄

六卷寫

富士谷成章

次第正保刊本と同じからず。刊本、江田世恭家藏豊前本、家本を以て校合し、素性、清正、是則、順、頼基、友則六人の集を除き、その他三十人の集に脱けたるを補へるもの。

歌仙歌集校合本

十五卷

正保の板本に富士谷成章の校合本、加茂季鷹の校正本を底本とし、種々のことを註せる東海林長汀校本あり。

歌仙家集

六卷

一名を三十六人集といふ。中川恭次郎編、明治四十二年發行。

三十六人集補 三卷寫

山川眞清

本願寺本、水野本、難波本その他の本を以て眞清の校合せるもの。天地人三冊靜嘉堂文庫にあり。

歌仙家集要 一卷寫

山本明清

始に諸本のことをいひ、次に歌仙の起原註書につき説明す。人麿の事績と合本にせり。

三十六人家集校本 三卷寫

山川眞清が本願寺本により校合せるに、天保十一年間宮永好の刊本と對照せるあり。

歌仙抄 二卷寫

下河邊長流

柿本人麿以下三十六歌仙の歌に詳註を加へ、初に略傳を附したるもの。百人一首改觀抄に體裁相似たり。自筆本
賀茂別雷神社文庫にあり。

三十六人集抄 一卷寫

天正十七年五旨の奥書ある本宮内省圖書寮にあり。

歌仙家集難抄 三卷

歌仙家集中二百數首を抜きて註釋す。天正十七年幽齋の著す所。天文四年板行す。

六々私抄 三卷

近衛龍山公自筆本により、半枚に肖像と歌をかき、上欄に歌による景象と歌の解を附し、寛文三年追考を加へ
繪を挿入して元祿七年甲戌正月板行す。神宮文庫本には北村季吟の註とあり。

三十六人集略解 一卷

香川景樹

始に一集ごとに短評を下し、次にその中の歌を抜き解釋す。桂園遺稿下に收む。

三十六歌仙集評釋 一卷

千勝義重

始に歌仙集につきて、次によき歌を抜きて評釋し、他は歌のみを抄出して註せず。明治卅六年印行。

卅六人家集寫真帖目次序跋

大 口 綱 二

會

序は三十二年阪正臣の作、跋は四十一年大日氏の作、明治二十九年大日氏が本願寺にて、後奈良院より證如上人に賜ひし家集卅六帖發見のことより本書の由來を明にせり。

歌仙家集類句

歌仙家集類標

類句の部を見よ。

歌 仙 部 類

三十六人歌仙傳

作家の部を見よ。

古今和歌六帖

十二卷

萬葉より後撰集頃までの歌を集め、唐の白氏六帖に倣ひて列ねたるもの。歌數は四千六百九十六首。一名を紀氏

六帖或は紀家六帖といふ。蓋し紀貫之の女の作とせるに由る。但し撰者に就きては諸説あり。袋草紙及八雲御抄等には貫之の作といひ、色葉集及八雲の一説には、後中書王兼明親王の作となし、契沖は寛和以後の才女の撰かといひ、眞淵は古今集以前の作ならむ。古今以後の作家の加はれるは、後の摺入かといへり。内容を檢すれば、契沖の説謬かならむ。部立は、第一帖歳時、第二三帖は地儀にて、始に山類を、次に水邊を擧げ、第四帖は戀雜別とし、主として人事を擧げ、第五帖は雜思、服色、色、錦綾の四つとし、第六帖は草、木、鳥、蟲とす。細目を擧ぐれば、二十五部五百十六事に及ぶ。寛文九年上板。

新校古今和歌六帖

一卷 寫

契

沖

古今六帖は蟲損雨濕のみならず、誤寫多くして、従來世に多く顧みられざりしを、萬葉を始めその他の書と校合し、後人をしてこの書の據るべき所を示したり。元祿四年漢文の序あり。

古今和歌六帖校本

六卷 寫

賀 茂 眞 淵

契沖の校正したる六帖を、更に校正したるもの。

同

一 卷

伴 直 方

二七

契沖の朱墨再校本に、山岡明阿の一枚を加へ、眞淵又一枚したるを、天保十一年伴直方再校を加へたるもの。

古今六帖題苑

小 一 卷

古今六帖の中、題を設けて意のよく適へるものを取りて列ねたるもの。契沖の撰と稱す。寛政三稔初秋、吉田四郎左衛門板行す。

古今六帖

二 卷 寫

黒澤翁 滿

天保十年假名を改め、同十二年門人觀海法師の書入本に照して、朱書を加へし自筆本、黒川眞道氏藏す。

古今六帖考證拾遺

一 卷 寫

契沖の考證せるを、文化三年二月、吟狎園の寫せる本あり。

和歌拾遺六帖

一 卷

契沖の新城古今六帖に書入せるを抜きたるものにて、前書と大同小異。本居大平の序を加へ、文政三年石津亮澄上板す。

古今六帖紀聞

一 卷 寫

度會 秀 俊

六帖の註にして文政七年の序あり。紙數二十八葉。萬葉の歌を引ききたるは大方僻調多しとして之を改め、作者の他集と異なるはこの集により、詞はその師足代弘訓の歌辭類聚にあるは省きたるよし凡例に云へり。一本神宮文庫にあり。

古今和歌六帖標註

六 卷

山 本 明 清

卷首に、提要、時代、書名、部類、作者、歌集、別本異同、校正書目を挙げ、次に標註を加へたり。井上文雄伊庭時言の序を加へ天保二年上梓す。◇明清は通稱潜之助、東溪と號す。寛政六年に生れ、天保六年に歿す。年四十二。岸本由豆流に學ぶ。四十二物評考證等の著者。

六帖類句

五 卷

岡 本 保 孝

古今六帖の歌を下句にて引く。排列はいろは順にて、歌の右に題とその下に卷丁とを記す。

古今和歌六帖類句

三 卷 寫

活字本にて、上欄に題を記す。

新撰六帖題和歌 六卷寫

一名を新撰六帖といふ。寛元二年、衣笠内府、爲家、知家、信實、光俊五人が、古今六帖題にて詠み出で、互に評點を加へたるもの。集中の歌は多く夫木集に取られたり。黒川眞道氏所蔵の一本は、化二年山本俊亮が狩谷披齋本に對校せるを朱書し、古抄本にて校せるを藍書し、夫木集を以て校合せるは崩黄にて書し、尙天保六年清水光房本を以て校合せり。明治四十年發行の續々群書類從十四歌文部に收む。

新撰六帖攷 一卷寫

岡本保孝

題の相違、詞の鮮釋、證歌等につき、清水漬臣、村上眞澄、植村正路等の校正本により、自家の考を加ふ。況齋叢書第四十三に收む。

二六類句 八卷寫

岸本由豆流

古今六帖新撰六帖をいろは順各句にて引くやうに排列す。天保の作にかゝる。松井則治氏一本を藏す。

御裳濯和歌集 二卷寫

寂延

天延の初伊勢に關係ある人々の古歌を輯めたるもの。片假名交りにて歌は千餘首二十卷とす。神宮文庫に一本あり。巻頭大中臣能宣の寛和二年花山院歌合の「春のくる道のしるべは」の歌を擧げたり。その原本は五福宣延明神主（河崎氏の祖）の眞跡本あり。元文三年初秋二十一日、從四位上度會常彰の寫せる本あり。本居豊顯氏も古寫の一本を藏す。

玄々集 一卷

能因

一條院の永延より後朱雀院の寛徳まで、六十年間の歌人八十八人の歌三百六十首を、歌人別に抜く。その體懷風藻などに似たり。但し傳を記さず。漢文の自序あり。詞華集にはこの中より取りたるもの少からず。類從卷一五八に收む。

後葉集 十八卷

村上天皇の頃より近衛院の御代までの作家の歌を抜き、四季、賀、別、旅、物名、戀、雜の部立により列ねたり。序によれば廿卷とあれど十八卷雜三長歌にて終れり。末の二卷缺けたるなるべし。類從卷一四七に改む。

續詞華和歌集

二十卷

藤原清輔

三

詞華集の續篇にもと二條院の御代に撰せるもの。院の崩御により遂に勅選の沙汰はなかりき。作者は一條院以降の人々。歌數九百八十八首。四季、賀、神祇、哀傷、釋教、戀、別、旅、雜、物名、戲笑の部立あり。井上頼園氏は清水濱臣の校正本を藏す。享和二年異本と校讐し、藍字を以て誌し、文化元年再校を朱書し、同二年代々勅撰私撰家集物語等にて異同を比較したるもの。類從卷一四八にも收む。但し堀本には清輔の記せる漢文の跋を缺く。尙俊成の正治奏狀には清輔私に撰みて勅撰に准ぜられむことを請ひしかど許されざりしよし見えたり。これは六條家と御子左家との歌學の確執上斯くいへるなるべし。

今撰和歌集

一卷

平家の頃の歌を抜く。四季戀雜の部立あり。主なる作家は清輔、顯昭、俊成、登蓮、小侍從等なり。歌數二百十六首。神宮文庫には村井敬義本あり。類從卷一五八に收む。

月詣和歌集

四卷

賀茂重保

平家全盛頃の歌千二百首を撰み、十二卷となし、壽永元年賀茂社に奉納せしもの。十二月の宮參の歌を列ねたる

故書名に冠す。假名の序漢文の跋あり。別雷社の神主賀茂重保歌に志すこと四十年、三十六人の百首を神庫に收めたる等の擧あり。これにたぐへて祐盛法師などを語らひてこの撰をなしたるよし序中に見ゆ。丹鶴叢書本あり。類從三六八にも收む。

月詣和歌集補脱

一卷

横山由清が山川正份の藏本を借り、刊本と校合の序に、別卷に寫置き、標註を加へたるもの。増補せしは百三十二首、句を補ひ異同を註するもの十五首、作者を補ふもの五首あり。安政五年出版。井上文雄の序あり。

門葉集

四卷

文治中の撰なれど、佚して今傳らず。桑門の集なりと云ふ。

玄玉和歌集

七卷

俊成、西行、慈圓、定家、家隆等六家集時代の入々の作、千餘首を抜き、神祇、天地、時節、草樹、釋教等十二卷に叙づ。漢文序假名序並べ擧げたれど、漢文は跋なるか。現存せるは七卷草樹下までにて歌數も七百三十三首に過ぎず。それより釋教に至る五卷缺く。撰者は僧侶なること序文に見ゆ。延慶三年散位中將祐仲の手寫云々と

奥書に見ゆ。

自讃歌 一巻

新古今時代の諸大家、即ち後鳥羽院を始め、式子内親王、良経、慈圓、俊成、通光、通具、俊成卿女、宮内卿、定家、家隆、有家、雅経、具親、秀能、西行、寂蓮の自讃歌、各十首づつ、を集めたるもの。序は後人の加ふる所なるべし。

後集十七家選

一巻寫

應永の頃勾當内侍の寫しおける巻物一軸、京都帝國大學にあり。自讃歌と同じきものなり。

自讃歌抄 一巻寫

東常縁

新古今時代十七歌人の十首づつ、の自讃歌に註を下せるもの。延徳四壬子孟春日於長安書之と奥書あり。

自讃歌註 三巻

宗祇

長文の序、文明十六年霜月中旬宗祇の奥書あり。宗祇繪抄と外題し、紙の下半に菱川師宣筆の肖像繪を入れ、そ

の上に歌を誌し、上欄に註を加ふ。寛永十三年中野道也上板。後寛文八年の再板本は二巻とす。

自讃歌註 一巻寫

素識虚幻が猪苗代兼載の説を首書とせる寫本宮内省圖書寮にあり。

自讃歌飛鳥井抄 一巻寫

始に宗祇の説を挙げ、次に自説を加ふ。飛鳥井家の誰の作なるを知らず。或は雅章卿などが。

ねなしかつら 一巻寫

進藤知政

河瀬普雄の教により、宗祇などの説を引き自説を加へて自讃歌を註せるもの。延寶五年の奥書ある一本東京帝國圖書館にあり。

自讃歌管註 一巻寫

惠南

風早公積の門下空華庵惠南の新古今時代の十七大家自讃歌に註せるものにて、寛保二年の自序あり。◇惠南は忍鎧子と號す。

秀歌之體大略

二卷寫

藤原定家

八三

古より當時に至るまでの秀逸の歌、百四首を撰せるもの。四條大納言公任の金玉集の歌より取るもの多し。二條家當流の範歌の集となり、加註の書も少からず。そは、三部抄、七部抄、詠歌大概等歌學の部に出す。

百人一首 一 卷

同

天智天皇より順徳院まで、一人一首づ、百首を撰む。その註釋異説等は別に項を設く。

八代集秀逸 一 卷寫

同

八代集即ち古今より新古今までの勅選集より、最も優れたる歌數首づ、を抜きたるもの。細川侯爵家には幽齋書寫の一本あり。圖書寮にも古寫の一本あり。

撰歌秀略 一 卷

小倉色紙和歌、八代集秀逸、秀歌之體大略を合綴せるもの。

萬代和歌集 二十卷

柿本人丸以下の古歌も交れど、主として平家の末より鎌倉の初期を撰す。寶治二年の奥付あり。寛文十一年寫本は廿六冊、丹鶴叢書本は十冊となせり。岡本保孝の自筆書入本あり。松井博士の藏たり。

萬代集緊要 二 卷寫

橘守部

萬代集中の佳歌を抜き、字眼の句、實句、語脈のよく續きたる句、又は風韻餘情等のあるを、簽を定めて記しつけたるもの。卷首に誌せる大旨には歌學上のことあり。その體萬葉緊要などに同じ。天保四年十二月に成る。自筆本橘純一氏藏す。

萬代和歌集類題 四 卷

藤堂保長の類題とせるもの。

檜葉和歌集殘篇 下卷一卷寫

平安末期より鎌倉初期へかけて奈良地方の人々の詠を集めたるもの。全部幾卷なるを知らず。首に卷數の記なきもの十七枚、次に卷七神祇の部あり、賀祝を附録したり。次に卷九饒別部の部驛旅を附したり。次に卷十雜の部一童篇、次に卷十一雜二語篇のみ残り。末に建長七年七月十八日書寫ことありて次に修補之時次第聊相亂敷。

八三

以他本一追又校合、蟲損之間、于時應永三十五年三月比終補之。中臣祐富とあり。卷頭に此集原本春日若宮神主千鳥上總介の家にあり。奥書の如く建長七年先祖祐茂手寫の本なり。古文書の裏に片假名にて寫せり。闕卷脱簡あり、「安永六年十月南都にて古葉略茶抄借覽之時此集一册その中にあり。南都の人々の歌を其比如此打聞のやうに集録せしなるべし。他所の人の歌たまたまあるは贈答につきてなり。童形の名とも珍しく聞ゆ。此集殘編なれども古集無疑、事によらば考勘の證となるべし」と朱書を加へたり。神宮文庫に之が寫本あり。

現存和歌六帖

一 卷

單に現存和歌ともいふ、又跋文にて續六帖と題せるもあり。後嵯峨院の勅により、草木花鳥蟲の題にて、鎌倉初め頃の人々百九十七人のよめる歌八百五十首を撰ぶ。中に就き、草木の題多く、鳥は十八種、蟲は十種に過ぎず。建長元年十二月十二日類聚畢云々の跋あり。類從卷百五十に收む。

東撰六帖

一 卷

鎌倉右大臣を始め、三品宮、泰時、重時、政村、長時等、關東武門の歌を、四季戀雜六帖とせるもの。題は全部あれど歌の現存せるは春の部のみ。續類從三六九に收む。

秋風抄

三 卷

小野春雄

新古今及新勅撰時代の人々の歌三百餘首を抜き、四季戀雜に分つ。但し兩集に載れる歌は取らず。建長二年の自序あり。その中に爲家、知家、信實、行能、俊成、隆祐、定家、家隆の歌風を品評せること、通光風體抄に於けるが如し。類從卷一五一に收む。

遺塵和歌集

一 卷 寫

藤原宗成

建長中その同族の人々などと詠める歌を集む。歌數多からず。圖書寮に一本あり。

雲葉和歌集

十 卷

貫之以下北條泰時の頃までの歌を抜き、四季賀露旅に分てり。戀雜は缺けたるならむ。現存の歌數八百七十四。集中の歌にて續古今和歌集、續拾遺集、續千載集等の勅選集にぬかれたるもの少からず。類從卷一五二に收む。

風葉和歌集

廿 卷

古今の物語中に載れる歌千五百三十七首（群書一覽には千五百八十首とあり）を抜き、撰集の體に倣ひ、四季

神祇、釋教、離別、羈旅、哀傷、賀、戀、雜に分ち、且作者の名には、物語の名若しくはその卷々の名を冠せたり。例へば波のしめゆふ御門の歌、うつぼの右少將仲頼などと記せるが如し。引ける物語の現存せるあり否らざるあり。随つて散佚せる物語の名を知る便あり。長き假名の序あり。文永八年に成りたるを知る。黒川春村の物語類字にはこの集を根拠とせる所多し。群集一覽には最後の二卷缺本の由記せしが、近頃國書刊行會にて、黒川眞道氏藏の村田春門校合本によりて印刷せられたり。丹鶴叢書本は四冊とせり。續々群書類從卷一四歌文部に收めたり。

夫木和歌集 卅 六

勝田長清

萬葉以降鎌倉中頃までに亘り、家集私撰百首歌合等より、撰集に洩れたる歌を廣く集め、四季十八卷雜十八卷とし、各綱目を立て證歌を載す。雅俗相雜れど、その拾蒐廣く且各種の體を具へたれば、後の萬葉集ともいふべし。扶桑の二字をとりて集名とす。契沖の刊本あり。寛文五年出雲寺藏板す。井上頼國氏は濱臣と同時代なる勇雄の校正本を藏し。黒川眞道氏は契沖本、古寫本、正路本、濱臣本、政信校合本を以て、更に校正せし善本を藏す。拔書及索引次の如し。

夫木集拔書 二 卷

連歌に便よきを抜く。如是庵主西順の奥書あり。上板。

夫木和歌集古調 二 卷

石津亮澄

袖中夫木和歌集 四 卷

同

前書は集中の古調の歌を悉く抜き、本抄の題に従ひ、異同をも委しく考へたるもの。後書は撰集家集に照合して異同を考へ、西順の拔書の誤ども正す。

夫木和歌抄書入 三十七卷

勇 雄

契沖の刊本を校正して、書人をなせるもの。◇勇雄は濱臣の友。

飛那堂乃塵 二 卷 寫

喜多村信節

始に夫木集拔書は群書一覽に西順の作と記せるは、跋をよく見ざるの誤なりといへり。以下夫木集中のよき歌を抜けり。

夫木和歌抄 一 卷

國書刊行會

同 索引 一 卷

同

甲は寛文五年板を底本とし、契沖本濱臣本黒川本により校訂し、明治三十九年發行。乙は語及句を五十音引とす。翌年發行。

夫木類葉抄 十二卷寫

夫木集の詞を引くに便あるもの。排列はいろは順による。

夫木類句 卅卷寫

いろは順第四句にて全歌を引く。

夫木類標 三 卷

高田與清

集中の地名をいろは引とす。

夫木和歌拾葉抄 六 卷

小幡正信

一名を歌林拾葉集といふ、本書中故事故語によりてよみたる歌八百餘首を、三百餘部の書を引きて註せるもの。西順の序、黒川道祐の跋あり。天和三年板行す。

夫木緊要 三卷寫

橘守部

集中要ある歌を抜き、萬葉緊要の體に倣ひ、種々の符號を用ひて、字眼或は實句、或は語脈の雅馴なる所、或は調の卑俗なる等一見して知り易からしめむとせるもの。總論には歌學上のことあり。天保四年の序あり。

新和歌集 二十卷

冷泉爲氏

新古今以後の歌人百八十六人の歌、八百七十二首を抜き、勅撰集の部立に倣ひて列ぬ。宇都宮にありたる時の撰にして一名を宇都宮打聞といふ。藤原時朝、宇都宮泰綱、その子景綱、蓮生法師、淨意法師、信生法師の歌多し。類從卷一五二に收む。

新和歌集目錄 一卷寫

新和歌集の作者を普通の作者、僧及女房に分ち歌數を擧ぐ。

正風體抄 一 卷

千載集の歌四十二首、新勅選の歌二十一首、續後撰の歌十七首を撰出し、四季戀雜に分てるもの。二條家の所謂家の三代集より引きたれば、恐らくは二條爲氏又爲世の頃のものならむ。古語深秘抄に收む。

續門葉和歌詞集 十 卷

憲 淳

文治以降嘉元の頃に至る間の僧侶の歌九千首を撰み、四季、戀、釋教、神祇十卷に分ちたるもの。嘉元三年漢文の序によれば、文治中に成りたる門葉集の續篇となさむとせること見ゆ。清瀧寺の若麿、喜寶齋の共撰なり。延寶三年奥附本によれば、憲淳編とあり。類從卷一五四に收む。

柳風和歌抄 五 卷

冷泉爲相、京極爲兼時代の歌を撰みたるものにて、四季戀五冊に分る。以下は缺本と見えたり。平貞時、宣時等武家の歌も少からず。類從卷一五八に收む。

續現葉和歌集 十 卷

龜山院以降醍醐天皇頃の歌を集め、四季、露旅、哀傷、神祇、釋教に分つ。二條爲世、爲冬、爲藤等の歌多く、大覺寺派の人々の歌も、その中に交れり。内藤甲斐守正範藏せし左中將爲冬眞跡本により書寫の奥書あり。類從卷一五五に收む。

臨永和歌集 十 卷

龜山院より後醍醐天皇の元弘の頃までの歌を抜き、四季、神祇、戀雜に分つ。笠置遷幸以前に成りたるものならむ。類從一五六に收む。

藤葉和歌集 六 卷

龜山院より後醍醐天皇頃までの歌を集め、四季戀に分つ。雜部は缺けたるにや。從來、風葉新葉と共に南朝の三葉と稱したるは誤にて、前書には、御醍醐天皇、御製を單に今上とせるに、此書は然らず。前書には源高氏とあるに、此書には權大納言尊氏など記し、又尊氏、直義、高師直、細川和氏などの歌多く入りたるなど却りて北朝にて撰ましめられしものならむ。類從卷一五七に收む。

拾遺風體和歌集 十 卷

新古今、新勅選以下弘長頃の歌五百餘首を、古今集の部立の如く列ねたるもの。續類從卷三七〇に收む。

安撰和歌集 二十卷

興雅

四季、戀、雜、釋教の部立にてもと千首ありしを、一より九まで、及十一より十三までの十二卷缺げ、爾餘の八卷即ち卷十、十四、十五の戀部十六以下雜の部のみ残り。歌數四百七十二首、眞言宗の人々の作多く、集名は安撰寺にて撰みしによるといふ。應安二年六月十三日寂覽に供したりといふ。享保十九年、高野の寶性寺にて發見、人々の奥書あり。續類從卷三七二に收む。◇興雅は安撰寺に住す。

菊葉和歌集 二十卷

二條師嗣

序中に、勅撰の沙汰なくして、年久しくなることを述べ、勅選の企あるときの参考にもとて撰せるよしことわりたり。應永三四年頃の作なるべし。現存せるは四季戀の部十三卷のみにて他は佚して傳らず。續類從三七二に收む。◇師嗣は二條良基の子、建徳二年に生れ、三たび關白となり應永二十二年薨す。年四十五、後光園院と號す。

松花集 一卷寫

文保の頃冷泉二條(爲世、爲定)その他細紳の人々の歌を撰む。もと十六卷ありしが、夙く殘缺し、寛永十二年

頃までは、淨辨の眞跡本二册ありしを又一册となれる由、新路正見の跋に見ゆ。賜齋拾葉卷四〇に收む。

飛月集 一卷

正中二年月次會の詠、三首歌、三十首續歌を載す。作者は冷泉家の爲世、爲冬、爲忠、鴨氏の祐躬、邦祐、祐守等なり。續類從卷三七三に收む。

二八要抄 二卷寫

古今より續後拾遺までの歌を抜く。現存せるは、戀の部一より八までの八卷のみにて他は散佚す。尹大納言師賢卿の眞跡本により寫す旨奥書あり。定家卿の撰と傳ふれどいかがあらむ。原本は前田侯爵家に存す。續類從卷三七四に收む。

閑居抄 一卷寫

四季、哀、別、戀、雜の部立を設け、古今以下八代集及玉葉集の歌を抜きたるもの。卷頭『年の中に春は來にけり』の歌、卷軸『世をうしとなれし都は別れにきいづこの山をとまりともなし』の歌あり。紙數五十七枚。舊有栖川宮家に一本あり。神宮文庫本には大永三年六月十五日正信の漢文跋あり。

撰歌風體抄 三卷寫

人麿、赤人、家持、貫之、躬恒等より一條天皇の御宇の頃に至る名高き歌人の入選の作を人別に抄出せるもの。上卷には人丸・赤人・家持・小町・遍照・行平・業平・敏行・千里・康秀・黒主・伊勢・素性・菅家・兼輔・宗子・是則・興風・深養父・元方・貞文二十一人の歌を収め、中卷には貫之・躬恒・友則・忠岑・中務・右近・兼盛・忠見・元輔・敦忠・朝忠・深徳公・好忠の十三人の作を収め、下卷には惠慶・重之・能宣・實之・道信・公任・高遠・長能・道濟・和泉式部・赤染衛門・紫式部・伊勢大輔・大貳三位・相模・周防内侍・道命・範永・良還・能因・經信・匡房の二十二人の歌を取る。高松宮家に一本あり。中には人名のみを擧げて歌を載せざるあり。

中古歌仙入撰集歌 三卷寫

上卷には源俊賴、藤原基俊、藤原顯輔等十七人、中卷には崇徳院等二十三人、下卷には後鳥羽院より後嵯峨院まで十九人の入選の歌を集めたるもの。高松宮家に一本あり。

續撰抄 一卷

足利末期の人々の佳歌を撰べるもの。卷頭には後奈良院の享祿五年正月御會始の、「來る春の道しある世に足引の

續撰吟和歌集 一卷

こなたかなたの雪や消ぬらん』卷軸「雲の上や春に近づく桃の弓のやちよをかけて君祈ららし』まで。末に歌員四百五十四首。此後撰吟集追而可令清書而已天文九曆二月日在判とある一本高松宮家にあり。

六字堂宗惠

後花園院の頃より後陽成院の頃までの歌三千餘首を、四季戀雜に部立せるもの。後寛政十二年尾崎雅嘉上木。

續撰吟集 八卷

永正より天文頃の歌を集む。神宮文庫には天文九年より十年に亘りて中野政範の寫せる本あり。讀文庫、林崎文庫、松崎文庫藏書印あり。群書一覽圖書解題に六卷とあれど八卷となれり。

倚國和歌集 二卷寫

法眼古軒

冷泉政爲、中院通秀、その他當時の人々の詠を部類す。編者の傳詳かならず。

いその玉藻 一卷寫

後土御門院の明應八年十一月天皇を始め三品勝仁親王、式部卿邦高親王、沙門道永、按察使俊量、權中納言元長、

参議權中將源重經、参議宣秀、右兵衛佐永宣の五十首の歌を集め、三條西實隆に點を命ぜられしもの。末に實隆の、「光あるいその玉藻のかすかすにあまのすさみの亂れて思ふ」の一首を添へて奉る。御製御返し「かきよすいそのもくづのかすかすに光をわくる浪の白玉」を下させ給ふ。一本高松宮家本、圖書寮本は御製五十首のみを挙げたり。

溫知和歌集 一 卷

定家雅經より、逍遙院、徹書記、宋世、道堅等の歌を部立なく集めたるもの。題號は溫故知新の語に取る。

和歌群玉抄 十七卷寫

近衛家々藏本にて種々の集を収めたり。その目錄次の如し。

- 卷一 十體和歌 二 十體附屬雜體 十戒和歌 師兼卿
- 卷二 十番撰歌合 家隆判 月十種 徹書記 大原十首贈答和歌
- 卷三 十二月富士和歌 源氏物語月次詞書
- 卷四 三十六歌仙 人麿『立田川紅葉々流る神南備のみむろの山に時雨ふるなり』以下
- 卷五 三十六歌仙 人麿『明日からは若葉つまむと片岡のあしたの原はけふぞ焼くめる』以下

- 卷六 三十六歌仙 人麿『たのめつ、來ぬ夜あまたになりぬれば』の歌以下
 - 卷七 新三十六歌仙 後鳥羽院御製 二通
 - 卷八 三十六人歌合 二通 弘長二年長月序
 - 卷九 新續歌仙 頼阿 三通
 - 卷十 新續歌仙 頼阿 四通
 - 卷十一 同上の續
 - 卷十二 女房三十六歌合 釋教三十六人歌合
 - 卷十三 四十八詠 頼阿 時代不同歌合 百番
 - 卷十四 曙暮百首 後水尾院撰
 - 卷十五 百人一首詞書
 - 卷十六 新百人一首
 - 卷十七 女房百人一首
- 以上今京都帝國大學圖書館にあり。

伯母集 二卷寫

古今以下足利末期までの人々の歌を集む。部立なく作者も記さず。打聞集といふべきものにて、精撰のものにあらず。野村尙房の説に一色某の伯母の撰といふと。

金言和歌集 八巻寫

戰國時代の人々の歌を集めたるもの。

五玉集 一卷

三條西實隆、冷泉政爲、姉小路濟繼、三條西公條、公瑜五人の佳歌を撰みたる一本。高松宮家にあり。巻頭早春湖をよめる、『さ、漣やうち出でてみれば朝日かけ春にほへる浦風ぞふく』以下

冷泉日次歌集 一卷寫

文龜の頃、冷泉家にて人々の詠みし歌を、日次によりて集めたるもの。

慕風抄 一卷寫

天象地儀より神祇に至る部門を立て、各部毎に細き題を設け、歌を擧げ、萬葉以下の書を引きて小註を加ふ。圖

書寮に古寫の一本あり。

練玉集 一卷寫

足利末期より、徳川初期にかけての人々の歌を、四季戀雜に分ち部類せるもの。近衛家に一本あり。

和歌坐右 十四巻寫

幽齋が古歌の則とすべきを撰出せるものにて。十四巻合綴五冊とす。門人佐方宗佐の跋あり。

風林新葉和歌集 二十一巻寫

雪玉、黄葉、衆妙、春鶯、沙玉、亞槐、碧玉、續撰吟、及着到日次等の集に見えたる歌を、四季、戀雜、公事に分つ。歌數多し。圖書寮に一本あり。

詞類集 四巻寫

十代集、中古六家集、雪玉集より戀に関する歌を抜き、初戀、不定戀、忍戀、洩戀、聞戀、不見戀、見戀等と題を設けて歌を擧げたるもの。高松宮家本。

希頭字集 一卷寫

新古今集時代より、足利季世にかけての人々の集中よりらりるの音を頭によめる歌を拾ひ集めたるもの。又らりるの歌と題せる本あり。高松宮家に古寫本あり。

摘題和歌集 三卷寫

新勅選以下、新續古今集までの勅選より歌を抄出し、春夏秋冬、戀、雜に叙てたるもの。圖書寮に一本あり。今出川家の舊藏たりしこと見ゆ。されば晴季卿などの撰にあらざるか。舊有栖川宮家本には、右此摘題集者は花園宰相實滿卿所持之本令書寫者也。尤一校了。于時寛文七年十月六日從四位下藤原實信とあり。

材林和歌集 五卷寫

下河邊長流

萬葉集、古今六帖、三十六人集、堀河百首等より三千百九十餘首を抜き、天象、時節、地儀、居所、人事、人倫、衣食、草木、鳥獸、蟲類等に分つ。彰考館にも一本あり。

林葉累塵集 二十卷

下河邊長流

公家を除き、當時の位なき武士、農夫、商人、僧侶の歌千三百餘首を、四季戀雜に次第したるもの。舉白集の歌も多く取りたり。自詠も百五十餘首加へたること自序に見ゆ。寛文十年刊行す。

隱みの三卷寫

藤原道高

六家集頃よりの人々の作にて、撰集に洩れたる歌を集め部類立をなせるもの、十四卷三冊とす。飛鳥井雅章卿の序あり。卷頭には慈鎮の『吉野山雪とやいはん霞とやいはむ』の歌あり。靜嘉堂文庫に一本あり。

水和歌集 二十卷

累集集の後集にて、彼集成りし後、遠き國々より送來れる歌の面白きを部類せり。心敬、宗祇、弄花等の歌も交へて歌數千首に達す。大阪天滿宮の文庫本は三卷本なり。延寶六年上木の本は二卷とす。

古往今來秘歌大體 二卷寫

葛岡宣慶

勅選集等より有名の歌を抜き、四季に分ち、注をさせるもの壬生忠岑の『春立つといふばかりにや』の歌に始り『大井川岸の紅葉は雨とふれども』の歌に至る。丸山正彦氏一本を藏す。朝田家藏書印あり。

難波拾草 二卷寫

葛岡宣慶

八卷

飛鳥井門下のかずとしといふ人、貞享五年の序あり。宗匠家並に難波に住める雅人の歌を集め、上卷には四季、下卷には戀、雜、四季、羈旅に部立して六十六人の作を擧げ、終に作者人名を擧ぐ。大本二卷もと徳山毛利家本なりしを今圖書寮にあり。宣慶はもと宮中に仕へしを故ありて官を退き大阪に住みしと見ゆ。

震翰新和歌集 一卷寫

永井尙政の囀により、藤三品羽林が上は後水尾院新院を始め奉り關白房輔以下公卿の人々一首つつ集めて一卷となし贈れるもの。

麓の塵 一卷

河瀬菅雄

天和壬戌に編む。當代の人々の歌を集めて部立す。新歌さざれ石の序にも、この集のことをいへり。京都津屋勘太郎板行す。

四十八人一首 一卷寫

貞敦親王、貞清親王、智仁親王、左大臣近衛信尋より參議永相に至る公卿四十八人一首撰にて、卷頭には信尋の「七夕の契もたえん夏引の手引の糸の長きためしに」の詠あり。或は後水尾院の地下三十六歌仙などに對して雲上の歌仙を撰まれしものか。圖書寮に一本あり。

柴の一本 一卷

了然尼

東福門院に仕へたる了然尼が、鐵牛和尙の佛弟子たらむとして美貌の爲に許されず、よりて熱したる銅盤にて顔面を焼き、本意を遂げたることを始に書し、その出發に際し集めたる集を板行する旨、序に見えたり。有馬重廣、戸田茂睡、清水宗川等の作を集む。◇尼名は總、大休と號す。後水尾院皇后に仕ふ。正徳元年歿す。年六十六。

堀江草 三卷寫

不深

元祿以往の人、大橋賀治以下七十餘人の歌、千數百首を、四季戀雜十卷に分つ。集名は序中に「堀江にたゆたふ破舟の棹の取る手もなく思へども、この道迷ぬ人をたのみ分けたどらんしるべまで」とあるに由る。元祿三年の日附あり。東京帝國圖書館本。

和歌鳥の跡 五卷

戸田茂睡

八卷

江戶の歌人、山名玉山、清水宗川、有馬重廣、狩野常信等の作、及自詠合せて八百餘首を鈔つ。元祿十三年の選にして、二年の後、平野屋吉兵衛上板す。

新歌さざれ石 六卷

了壽

表題に鳥跡後集新歌さざれ石と記せり。戸田茂睡等の江戸の歌人、及京畿の人々の作を集む。元祿十六年上板。◇了壽は柳陰と號す。

歌林尾花末 五卷

植山梅之

當時の人々殊に京郷附近の人の作を集む。撰者は鳥丸大納言光廣の流を汲めるもの。元祿十六年板行す。

近代和歌集 一卷寫

靈元天皇

近代の人の詠みし四季の歌を撰ばせ給ひしものにて、奥書に小川坊城俊廣卿拜寫とある一本あり。

和歌真言葉 一卷寫

神代眞語、現形尊詠、宮社託宣、君臣英言、可知言葉等の部を立て古歌を撰出せるもの。寛永四年の日附あり。

和歌繼塵集 三卷

阪靜山

渡邊友益、岡本宗好、吉川惟足、清水宗川等、當時の人々の歌八百餘を、四季、饒別、哀傷、霧旅、戀、雜、神祇、賀に分つ。寶永七年上板。

和歌視今集 三卷寫

豊臣秀三

公家の外、常縁、宗祇、道堅、玄旨、長嘯子より、近代の人の作を集め、撰集の體に倣ひ、部立を設けて二十卷とす。正徳元年漢文の自跋あり。歌數多し。集名は韓子の古を視る猶今を視るが如しの句に取る。伴直方の天保十二年の寫本あり。

心花集 一卷

周欽尼

夢想の「世の人に用ひらるるや花の兄」の句を頭に置きて梅香遠黨といふことを人々に勸めて詠ましめ、又更に梅有佳色といふ歌を集めたるもの。巻頭大宮司大中臣忠長の「よそながら花の香遠く誘ひ來て咲きぬと匂ふ梅の下風」以下。正徳五年八月度會常昭の序を加へ上木。神宮文庫本。

清渚集 一卷

周欽尼

神宮の詞官その他神都の人々の詠を部立を設けずを集めたるものにて、首に正三位荒木田氏富の寄草戀「浪川逢潮もかかる浮草は誘ふ水さへあらじとぞ思ふ」の歌あり。度會滿彦の齋館に籠りてどか感應といへるが如き面白き詠あり。集名は頓阿の「伊勢の海清き渚の名もしるく光ことなる玉を見るかな」の歌による。神宮文庫本。

玉匣集 一 卷

芝田善淳

中院通茂公門下の松井幸隆、村井椿春、眞野一棟、杉野甘齋その他、地下并に地方の人々の詠を部立して集めたるもの。巻頭には空華堂忍鑑子の「長閑けしなけふ立つ春に先むかふ小日枝の杉の雪もかすみて」の詠あり。享保十六年辛亥鹿角解日洛下芝田善淳集むとあり。神宮文庫本。

和歌山下水 三 卷

阪 静 山

古きは東野州玄旨法印より、新しきは當代の人九十九人の作中、安らかなる歌を抜き部立を設けて列ぬ。終に作者大略目録を附す。享保十七初夏執筆於蠡海堂云々とあり。自序及門人吉益、守益、玄忠の跋あり。享保十七年板行す。

和歌和泉袖 三 卷

同

元文四年坂將實撰す。當時の人々及門人の歌を採り四季戀雜の部立を設けて列ぬ。上木。

玉々集 一 卷 寫

雲上堂上の名家、後水尾院、靈元院、幸仁親王、道見親王、烏丸資慶、素然、中院通村、同通躬、白河雅喬、清水谷實業、武者小路實隆、冷泉爲久、烏丸光榮、飛鳥井雅章等の作を部類したるもの。三矢重松氏一本を藏す。

采藻編初篇	一 卷	源 影 面
同 續篇	一 卷	同
同 後付	一 卷	同
同 作者目録	一 卷	同

當時の人々の詠を集む。初篇は寶曆九年に板行、續篇以下は同十二年に板行す。後付は初篇の非難を辨せるもの。作者目録には、正續兩編のを出す。

和歌渚の松 九 卷

松 宮 俊 仍

累塵、萍水、和歌鳥の跡等の集に倣ひ、友人並に自己の詠を集め、四季、釋族、雜、回文、長歌に分つ。寛延元

年の長文の自序及松風也軒及淨光居士の跋あり。◇俊仍は觀山又は觀梅道人と號し、武士道鼓吹者の一人にて、別に加藤枝直と和歌を論じたる書あり。安永九年歿す。年九十五。武士道に關する著多し。

澤水 一卷寫

石野廣道

二十一代集六家集源氏物語等より忠孝君道恩愛の歌をぬきて撰せるもの。所々自家の考を加へたり。寶曆五年に成る。澤水の名は著者が赤阪溜池の畔に住みし時の作なるより負せしもの。上下二卷。

松の下葉 五卷寫

山室松軒

冷泉爲泰卿の教を受けし、後倚松庵の主人が越前に關する古今の歌六百餘を集めたるもの、明和庚寅本多成安の跋あり。神宮文庫本。

奇題歌集 一卷

天地時候、人倫身體、草木及竹、蟲、魚貝、鳥、獸、器物衣服、室屋、雜の部を設け、古來の集より奇題を抄出したるもの。寛政二年青木元隆の寫本により文化五年片岡寛光の持本によりて齋藤彦麿の寫せる一本慶應大學圖書館にあり。

民草ぶり 一卷

伊形質

士農工商の部題によりて歌を輯めむとて、まづ農民に關する肥後人の歌を、四季の順に集む。安永天明の頃の作嘉永六年佐吉の跋あり。肥後文献叢書卷三に收む。附録に八代芦北の歌あり。◇質字は大素、肥後の詩人。

袖中和歌六帖 二卷

小澤蘆庵

古今六帖新撰六帖の中、宜しき歌を毎題五首つとし、足らざるは他より補ひたり。小河布淑の序、蘆庵の跋あり。安永の初に成り寛政九年上板す。

紅葉集 一卷寫

荷田東麿、加茂眞淵、橘常樹、上田秋成、吉川惟足、阪將曹等の歌を集む。四季の部一卷あり。終に安永八年五月二十九日雀部清高寫本を以て寫す旨記せり。

百家類集 上下小二卷

富士谷成壽

元慶天曆の頃より文龜享祿の頃までの佳歌をぬき部立したるもの。寛政四年卯月の序あり。

和歌實踐集 一 卷

加藤景範

二十一代集より詞書の歌を抜き、四季戀雜に分ち、終に詞書の心得等を載す。寛政七年に成る。上木。

霞 關 集 二 卷

石野廣道

曲妙集の作者源高門以下、百八十八人の歌千二百餘を撰みたるもの。十卷二冊とす。別に作者目錄一冊あり。生歿著書等をも記入し参考となすに足る。寛政十年成る。萬齋佐々木萬彦校正し翌寛政十一年上木す。六本二冊蹄溪藏版。◇廣道は幕臣にて冷泉爲村の門に出づ。八十一歳の撰にかかる。

細 江 草 三 卷 寫

羽山蘭子

近世名家、遠州地方等の知友の歌に夫百竹軒及自己の詠をも合せ千三百八十餘首を四季戀雜の部立によりて撰む。大串元善の序及自序あり。書名は「打よする細江の波の清ければ拾ふ玉藻に光こそあれ」の詠にちなみたるなり。十卷三本とす。

古 今 選 小 三 卷

本居宣長

古へ今の歌集中より、よき歌を撰出せるを、文化五年村田並樹の序を加へて上木。五卷三冊とす。

近 葉 菅 根 集 五 卷

清水濱臣

長歌の部を見よ。

秀 麗 集 四 卷 寫

六人部是香

三代集以下の集中、則とすべき歌を抜き、四季戀雜に分てるもの。文化十二年十二月十一日自序あり。尙この序によれば、萬葉秀麗集も撰みたりと見ゆ。山城國向日町六人部家に自筆の一本あり。

奴 豆 乃 舍 集 二 卷

長谷川菅緒

京都の奴豆乃舎にて、本居大平、同建正、城戸千楯、及菅雄等毎月望の日相會して詠せる長歌を輯めたるもの。文化十三年撰、翌年上板。◇菅緒は通稱三折。和泉の人、本居宣長の門。

詞 林 聚 葉 二 帖

公卿短冊五十枚を一帖とせるもの、文化十四年山科家にて調達せるもの。甘露寺國長以下の人々のを收む。圖書

寮にあり。

不盡の煙 二卷 寫

近藤守重

乾の巻には、家康公の歌及附存紀事を載せ、坤の巻には台徳公より有徳公までの將軍の詠を撰み、別録に庶流後官の作を載す。文化十四年の撰。◇守重は幕臣重藏と稱す。北海探險の功あり。文政十二年歿す。年五十九。

春風集 二卷

市岡猛彦

愛知の人々の歌千餘首を集め四季に叙てたり。加藤磯足序を加へ文化十四年上板。東北大學本。

門のおち葉 二卷

本居春庭

部立を設けて門人并に父の教子の詠を集む。文政元年の序あり。巻頭荒木田武泰の『かねてより思ふ心のうら、かにまさしく霞む初春の空』以下。須受能耶の藏版、又錢屋利兵衛よりも出版。

門のおち葉後篇 二卷

殿村常久が春庭の志を助けて開版のことを斡旋せるものにて文政十三年本居有郷の序あり。春庭歿後三年に出版

す。巻頭には小島久足の『待ちえたるけさの心の嬉しさも何故ならぬ花鳥の春』の歌あり。

草縁集 四卷

天野政徳

近世二百十三家の、長短歌、俳諧歌、折句、物名、旋頭歌を撰む。終の一卷は文の部に、説、辨、考、序、題、跋、記、物語、消息等に分つ。十二巻四冊。文政四年上刻。

八十浦の玉 四卷

本居大平

眞淵及其の門下、又編者及其の高足の古調の歌を集めたるもの。文政五年になる。同年自序及同十二年加納諸平の序を加へ、上巻は天保四年に中下の巻は同七年に上板。

霜葉集 二卷 寫

藤原清意

季鷹、元雄、貞臣、定良、常操等の歌六百餘を撰す。書名は霜葉二月の花よりも紅なりの義にとる。文政五年成る。京都帝國大學に一本あり。

後鈴屋名残の落葉 一卷 寫

竹内直道

本居春庭の門人の歌を集む。巻頭「一夜あけて空よりも猶のどけきは心に春やわきて立つらむ」以下。文政十三年九月釋善立の寫せる本あり。所々に善立の考を附箋す。神宮文庫本。

秋野の花 三卷寫

木内 有溪

愛子良胤の死を悲み、その集を出す代りに天保四年友人の詠を集む。菅沼定敬、村上素行等の歌多し。

和歌類題浪花集 小二卷

山本 春樹

浪花地方の大家、雅嘉、亮澄、春門、戊申、良臣、正澄等二十三人の詠を部立して集む。天保五年上板。

和歌八島波 二卷

城戸 千屯

當時の人々の詠を撰ぶ。藤井高尙の序あり。天保六年の撰、翌年上刻。

摺葉大成 五卷合一冊

和歌、雜體、狂歌、詩、俳歌を各一卷とし、部立を設け當時の人々の作を載す。始二卷は黒川春村の撰、狂歌は桑揚庵市萬侶の撰、詩は大江章雄、俳諧は雪中庵對山の撰にて、黒澤翁滿の序あり。天保九年千束庵藏板たり。

新採和歌集 三卷寫

吉田 令世

一卷は君臣父子の部、二卷は子、夫婦、兄弟、朋友の部、三卷には神、文學、武の部に分ち、古來よりの歌を抜き、下に作者を擧ぐ。撰者の自筆本佐々木信綱氏藏す。

瓊玉集 二卷

中島 廣足

長崎地方の人々の詠を主とし、京阪その他地方の人にして長崎に遊べる人等の詠を部立を設けて撰びたるもの、天保十一年上板。瓊浦は長崎の一名なり。

近世八家歌集 三卷

野口 正武

長流、契沖、眞淵、成章、宣長、蘆庵、千蔭、景樹八大家の歌を抜く。草垣舎殿村茂濟の序及撰者の自跋あり。

瓊齋社友年々百首 二卷

野々口 正武

社中の人の百首を基とし、之に父隆正の歌その友人の歌及四大人等の歌を加へ、四季雜に分てるもの。始に戀歌の論あり。弘化四年上木。◇正武は長手武政の子、隆正の養子となる。小野の一柳侯に仕ふ。

近世名家歌集

小七巻

鈴木重胤

天保十四年伊吹舎入門の爲、浪花滞留中、契沖、春満より古學起りし以來當代の人々も集めて、四季、戀雜に部類して上木せるもの。

武林秀調

三巻寫

權田泰從

前大平記、保元平治物語以下義士傳、介石記等七十九部の書より武家の佳什を主とし、公家、儒釋、婦女、雜家を附とし、上巻には古代の部として鎌倉時代のを、中巻には中古の部とし、足利、豊臣時代のものを、下巻には近世の部とし、徳川氏創業の後のものを收む。天野政徳の序、千阪畿の跋を加へ、弘化丙午自序を添へたり。◇泰從は幕臣從五位下に叙せらる。一本松井簡治氏所藏。

類集披華抄

櫻花、秋草、月、菊、紅葉、雪、氷、鳥、蟲、梅、貝、雜本草、竹、海草等の歌を、家集、撰集、雜史、日記、物語等より抄出して集めたるもの。鳥の部に閑田詠草を引きたる所あり。制作の時代を窺ふべし。

清渚集

三百五十巻

橘守部

平安朝の始より享保年中まで千餘年の間の名歌を類聚すとあるものに見えたれど、未成のものなるべし。未だ管見に觸れず。

養老和歌集

三巻寫

五十嵐篤好

眞淵と御杖との歌八百餘を抜き、九巻三本とせるもの。嘉永四年越中二上山の麓なる養老寺にて編む。

都州集

二巻

八田知紀

日向都城地方の人々、七十餘名の歌を部立して輯む。嘉永五年大館晴勝の序あり。翌年上板。

鄙の手ぶり

二巻

半井梧庵

主として伊豫地方の人々の詠を四季、戀、雜、長歌と部立して輯む。嘉永七年岡本親恪の序を加へ上板。末に宇和島、吉田、大洲、新谷、松山、西條、小松、今治、公領、廣島と地方を分ちて作者人名録を掲ぐ。◇梧庵は文化十一年に生れ、明治二十二年に歿す。醫を業とし法橋に叙せらる。七十二歳の時の作。この他歌格類選を作る。

鄙の手ぶり二篇

二巻

半井梧庵

前編の續篇。作家三百十六人。前篇より地方を擴げ山陽地方の作者も加へたり。安政二年の作。

三熊野集 二卷

西田維恒

主として紀伊地方の人々の作を取り、部立して叙づ。安政二年上版。

摘英集 一卷

井上文雄

光霽君以下横山由清、間宮永好、鬼澤大海、久松祐之等の人々の歌を撰す。安政三年の序あり。柯堂塾藏梓。

はなのしづ枝 小一卷

一名を現存五十歌仙といふ。杵築の人々、千家尊孫以下五十人の秀逸を抜く。市岡猛彦の跋あり。安政四年上板。

麻葉和歌集 二卷

神山魚貫門下の人々、主として下總、上總、常陸の人々の歌を四季、戀、雜に部立して撰びたるもの。安政四年三橋鶴彦の序、圓融寺海應の跋を加へ板行す。終に集中人名録を擧ぐ。素朴の作多し。

小門の汐干 二卷

八田知紀

日向地方の人々百三十餘名の歌を部を分ちて集め、安政六年上板す。終に歌人の姓名録を載す。

月代和歌集 二卷 寫

白蓮

契沖、眞淵、宣長、蘆庵、景樹の歌、合せて千首を抜きたるもの。安政三年の自序あり。よき歌多し。自筆本黒川眞道氏藏す。二十卷二冊とす。

雨夜のなごり 一卷

千歳一

部立して盲人の歌百九十餘首を收む。松惠及風香一の補助せること、清水謙光にも誂へて正したること安政四年の序に見ゆ。同年刊行。◇千歳一は江戸の人、小關氏、安政中檢校となる。『松の葉數に比ぶとも』の名吟あり。

蘆の一葉 小一卷

美濃の高須の人吉田利啓、同利純が渡忠秋などと詠める歌を撰びたるもの。安政五年上木す。

同 二篇 小一卷

前の續篇にして彈正少弼雅言の序を加へて安政七年上木す。

垣内摘草 小一卷

伴林光平

安政六年上木。友人門下の歌を集めたる小冊子なり。

大江戸倭歌集 三卷

蜂屋光世

文政の頃より安政五年まで、當時の人々の歌二千餘首を抜き部立せるもの。安政五年の自序あり。同七年上板。六卷三冊とす。霞關集にならへる由見ゆ。

汲古集 二卷寫

四季、戀、雜の部を設け幕末の人々の詠を撰びたるもの。中に鍋島齊正、中山信守、渡邊則綱、松平勝成、水野忠央、水野忠啓等の諸侯の作も收めたり。序、跋なし。稿本と覺しきもの圖書寮に一本あり。その書風又その一族の歌を入れたる點より考へて、前田夏蔭の撰にあらざるかと思はる。

咀英和歌集 一卷寫

加藤一周

友人の歌七百首中、優れたるを抜き部立せり。萬延元年に成る。◇一周は齊藤彦磨門にして、文久中瑞忠實と歌會の歸途、誤りて、人に斬殺せらる。

六家集 一卷

深見登之野

文久二年の序あり。六家集とは、八千代女詠草、美志子詠藻、忠明遺稿、千壽百首、三河三十六人撰、千籠舍詩集を合稱す。

採玉集 十六卷寫

吉田正準

初篇十卷 後篇六卷。共に土佐の人々の詠を集めたるものにて、初篇は元祿より文久元年までの人々の詠を撰み四季戀雜上下以上八卷、長歌の部二卷とす。横山直方の序あり。正準の子孝繼、父の志を襲ぎその業を完成せしもの。後篇は天保より慶應三年の春までの人々の詠を孝繼が撰みて四季戀雜に分てるもの。土佐人の作品はこの集に多く入れり。

三都集 一卷

難波、江戸、京都の宗匠が、花月雪の題にて人々の歌四千七百七十餘首を撰びたるもの。作者三百七十人。文久二

年一玄齋廣重の畫を加へ上板す。

さきはひ草 一 卷

井上文雄

摘英集の續篇にて柯堂社中の人々の歌を撰みたるもの。大神御牧の序あり。摘英の名を難するものあり。よつて萬葉の詞によつてかく外題す。元治元年上板。

鶯花集 上 卷

至清舎捨魚と耕歌堂淨月の合撰にて諸國の人の詠をぬき繪を挿みて上板せり。零本。

明教館草本

源たつゆき

眞淵の歌百二十五首、蒼生子の歌九十首、春海の歌百八十五首、千蔭の歌百三首、きよい子の歌百九十首を抜き、上に○△印を附す。元治元年八月に成る。南葵文庫に一本あり。

宮城百人一首遺稿 一 卷

日野資始

宮城百人一首を撰む爲、藩の人々二百餘人の歌四百五十首を輯む。仙臺叢書第二集に收む。慶應二年成る。

調鶴集 一 卷

井上文雄

門下の人々の歌を部立して撰めるもの。慶應二年成る。

蘆屋集 一 卷

安保、徹道、元矩以下人々の歌を部立して集む。卷首には「惜まれし年の一夜も名残なく明けて長閑けきけさの初春」の歌あり。刊行の年月明かならず。大阪市立圖書館に一本あり。

椎園萬葉 六 卷

海上胤平

四季の部立を設け近世の人及自詠をも加へて題詠者の便とせるもの。

夕日岡月次集 一 卷

伊達千廣

知友門人の歌を撰びたるもの。歌數多からず。青木雅宣の跋を加へ、明治四年上木。

千船集 一 卷 寫

堀内清孝

土佐國須崎附近の人人の歌を集む。明治元年成る。土佐群書類從に收む。

大天

一窓集草稿

平千胤

社友の歌を輯む。作者從二位清水谷公正以下の人々なり。明治六年上木。

明治歌集 三十八卷

橘とせ子

明治歌人の什を部分して集む。第一篇七冊は麻波發忠、松浦詮、勝安房等の序跋を加へ明治八年上木。終に作者姓名録を掲ぐ。同二篇三冊は十年に、三篇十二冊は十二年に、四篇四冊は十三年に、五篇三冊は十五年に、六篇三冊は十七年に、七篇三冊は二十年に、八篇三冊は廿三年に、木。とせ子歿後は嗣子道守代りて撰して發行せり。◇道守は守部の孫、冬照の子、嘉永五年に生れ、明治三十五年に歿す。年五十一。とせは文化三年に生れ、明治十五年に歿す。年七十七。冬照の妻。

明治花月歌集 一 卷

下澤保躬

永祿以降明治までの歌千首を四季、戀に分つ終に母の六十賀の歌を載す。佐佐木弘綱の序あり。明治十一年上木。

明治 三十六歌仙 一 卷

山田謙益

三條西季知より千家尊福まで、明治の大家三十六人の一首撰にて、明治十年上木。

新選名家歌集 一 卷

根岸千引

上は孝明天皇、今上陛下を始め、三條公、木戸、徳川、勝等の人々の名吟を部立を設けず載せたるもの。終に英人チャンプルの「君が爲咲きて残れる三吉野のよしの、山の花ぞこの花」の歌あり。明治十年上木。

實 薰 集 一 卷

近藤芳樹

三條公珍藏の名香に因み、寄薰物祝といふ題にて、朝野の歌人のよめる什を集む。明治十一年上木。

開化新題歌集 一 卷

大久保忠保

太陽曆、紀元節、電信機等の新題百七十七、作者百二十六人の歌を載す。星野千之の序あり。明治十一年上木。

瀧のしづき 二 卷

黒田清綱

八光

近代の人三十人の歌を抜き部立を設く。税所敦子、渡忠秋の序、門人西川廣微の跋あり。明治十一年上木。

餘力詠歌集 一 卷

加藤公阿

一名を明治新題といふ。明治十二年出版。

聯玉和歌近代集 二 卷

毛利千秋

近代の人の歌一萬首を集む。岩崎維謙及松の門みさ子の序あり。明治十二年板行す。

聲 香 集 一 卷 小

河瀬徳兵衛

河本延之の七周忌に方り、門人又は知友の歌を乞ひ、之を四季雜の五題に分ちたるもの。明治十二年上木。圖書寮本。

開花新題集歌二篇 一 卷

大久保忠保

前の續集にて、作家百四十六人。明治十二年出版。

篠 並 集 二 卷

服部春樹

近江に山縁ある人々の歌を部立して集む。明治十二年渡忠秋等の序あり。翌年上板。

梅 木 抄 一 卷

小川清流

會津人士の歌九十七人の詠を収む。墨付三十八枚。菊池研介氏之を追補し百八人となし歌數六百二十八首に増し且梅木抄作者部類を附せり。◇清流諱は直余之、通稱傳吾、紫蘇園と號す。澤田名垂及野方常矢に學ぶ。明治二十五年歿す。年七十三。

勢 海 集 一 卷

岡吉胤

伊勢の人人の作を類題とせるもの。明治十三年に出版す。

明治開化新題集 二 卷

佐々木弘綱

新題をよめる詠を集む。作者七百七十八人。明治十三年上木。

千 草 の 花 六 卷

高崎正風

臣民より祝賀の爲、奉獻したる詠を縣別とし、序を加へ、明治十三年宮内省にて開板。

三

八頭山集 小一卷

井上氏廣

毛利公が高輪の新邸に祖先の靈社を立て、山口の豊榮の神を合祀せし時、人人の歌詩俳句を集めたるもの。明治十三年上版。

秋田歌集 二卷

江幡澹園

四季雜の部立にて、秋田縣人の歌を集む。澹園及同姓通理二人撰す。一名歎冬集といふ。秋田路に因むなり。明治十三年印刷。

夜鶴集 二卷 寫

佐々木弘綱

一子信綱の爲に後撰集以下勅選より三四首づつよき歌を抜き部立したるもの。佐佐木信綱氏所藏。

千題千首明治歌集 一卷

大野定子

千題千首を部立す。明治十五年黒川眞頼の序を加へ上木す。◇定子は大槻文彦博士の叔母。

東京 大家 十四家集 一卷

平井言滿

徳大寺宮内卿より十四人の人人に得意の歌三十首づつ書きてとありしに、短冊に書付けて天覽に供せしを傳へて上木す。十四家とは次の如し。

嵯峨實愛 山本實政 福羽美静 黒田清綱 高崎正風 本居豊顯 鈴木重嶺 間島冬道 三田保光
黒川眞頼 池原香釋 伊藤祐命 小出榮 松波資之

東京 大家 十四家集評論

海上胤平

明治十七年出版。批評の部を見よ。

熊毛集 一卷

上妻宗武

部立して薩摩種子ヶ島の人人の詠を集む。明治十四年渡忠秋の跋、村山松根の序あり。明治十六年上木。

御代のはな 三卷

彈舜平

明治十八年の御題雪中早梅を世の人人よみて奉れるものを輯む。佐佐木春夫の序あり。明治十八年上板。

月潮梅風集 一 卷

佐々木弘綱

始に人人の月潮梅をよめる短歌を挙げ、次に自家の月潮梅花百詠を、終に長歌を載す。明治十八年上板。

明治現存續三十六歌仙 一 卷

豊島市五郎

近衛忠照より久我建通に至る。明治十八年上木。

明治佳調 一 卷

平野春躬

明治の人人の佳什を集めて、明治十九年上版。

幾久能志太播 一 卷

村山松根

京都華族歌會所作の歌を集む。宇田淵及近藤芳樹の序、小出榮の跋あり。明治十九年上木。

熱海調音歌集 二 卷

小島泰堂

萬葉以下の古集より熱海地方に關係ある歌をぬき更に現代の人人の熱海をよめる歌を集めたるもの。明治十九年

版行す。

越佐歌集 二 卷

石丸忠胤

新潟縣令永山盛輝以下越後佐波に關係ある人の歌を部類す。敷田年治の序あり。明治十九年上板。

大八洲歌集 二 卷

本居豊穎

大八洲學會誌上に載せし人人の詠を抜きて部立し、明治二十一年印刷す。後海上胤平氏同會會長幹事等主なる人の詠を駁せしに對し、春日敬之氏明治廿六年詠歌邪正編を著して之を辯す。

聲 廻 餘 波

鈴木重嶺

亡友追悼會の記念として、寄子規懷昔といふ題にて人人の歌を請ひ集めたるものに、師の三回忌に久貝正典以下の人人の短冊を供へたるその寫を加へ廿一年上版。千家尊福の序あり。

邦光社會歌 三 卷

明治廿一年八月より同廿六年十一月に至る六輯。

近世三百首 一 卷

近世歌人のよき歌を集めたるものにて明治廿三年上版。

彈 舜 平

八七

東海拾玉 一 卷

知人その他の人人の詠を部立して輯む。明治廿二年上版。

井上喜文

ちとせの菊

明治廿二年立太子の典ありし時人人の奉れる歌及詩を輯む。川田剛の序あり。明治廿三年上木。

蓬園月次歌集 一 卷

松 浦 詮

松浦家にて月次に同人のよめる歌を集む。編者は三田葆光。序は本居豊顕。明治二十三年上版。

菊の下葉第二集

京都華族間の歌會たる同陽社の人人の詠を尾崎宗夫の編みて、山階宮晃親王の題辭を乞ひ、明治廿四年に出版せ

るもの。

千代田歌集 三 卷

佐々木弘綱

明治歌人の歌を集む。初篇は廿三年に、二編は廿四年に、同三編は廿六年博文館より出版。

明治響洋歌集 二 卷

砂 川 雄 健

姫路の響洋社の人人の詠、九十集中より抄出し、之に高名高官の人の付を加へ、明治廿四年上木す。本居豊顕
山弟彦等の序あり。

熊 樞 集 二 卷

甲 斐 一 彦

熊本の人小山多平理以下六十六名の詠を輯めて明治廿四年出版。

明治佳調集 一 卷

木 山 清 名

小中村清短、佐佐木弘綱等明治の人人の付を輯む。鈴木重嶺の序あり。明治廿五年上板。

新撰長歌集 一 卷

近世の長歌を集む。明治廿五年岸本宗道氏と同撰。

大宮宗司等

千種の花 二 卷

部立して門下の人々の詠を集む。明治廿五年發行。

彈舜平

淺瀬の波 二 卷

部立を設け、門人の歌を主とし、之に知己の歌を加へたるもの。清新の作多し。明治廿六年出版。◇清風は安政四年に生れ明治卅三年歿す。年四十四。案山子適舎といふ。鎌田正夫に學び同志社に教授す。

池袋清風

蜻蛉集 一 卷

主として困伯地方の人の歌及其師飯田年平の師なる、加納諸平の詠にて柿岡集及同拾遺に入らざる歌をも載す。その始に新貞老の序及同氏の萬葉集摘英新釋總論の中を抄して載せたり。明治廿六年第一集を出版。

進藤泰世

明治歌集 三 卷

佐々木信綱

一篇は春夏 二篇は秋冬、三篇は戀雜に分ち當代の作を撰す。始に廿七年宮中御會の歌を載す。明治廿七年博文館にて發行。

瓊戈集 一 卷

芳賀真咲

日清戦役の時の人人の歌を集む。巻頭に「神代より根ざしかはらぬあし原の國の榮ぞ限しられぬ」の御歌あり。山階宮晃親王以下朝野の人人の詠を収む。明治廿八年印行す。

歎冬の加吉葉 二 卷 編

江幡通理

秋田地方の人人二百六十七人の歌七百四十六首を部立し、自序を加へ明治廿八年印行す。

會津根集 一 卷

渡邊雄治

會陽和歌集、磐梯集、樺木集を本として會津地方の人人の詠を撰す。二瓶直香の序あり。明治廿八年初編を出す。

皇風集 一 卷

諏訪忠元

明治二十六年の頃大八洲雜誌、筆の花、文林閣の冊子に歌を募りたるを、その後集めて加藤松園に撰を乞ひ、津

八巻
輕承昭の題字、福羽美靜の序、鈴木弘恭の跋を加へ四季雜に分ち、明治二十八年に出せるもの。末に作者を東京のは、いろは分、地方のは國分にして出せり。

櫻の根分 一卷 寫

諸橋弘志

日清戦役に際し人々の歌を集めて大本營に奉りしもの、献上本圖書寮にあり。『天つ日のかげに背きしもろこしもやがて光を仰ぐべきかな』以下。

山櫻集

岩崎英重

征清の役の時、上は兩陛下の御製御歌より人々の忠勇の歌を集む、湯本武比古の跋あり。

和歌甲斐嶺集 一卷

丸山道太郎

類題集にて、終に甲斐の賛歌數首を載せ、明治廿九年出版。

邦光社歌會十二集 一卷

廣田常善

邦光社の人々の歌を撰びたるもの。文秀女王の題歌あり。賀陽宮邦憲王妃好子殿下以下の人々の歌を收め、明治

三十二年印行。

邦光社歌會十三集 一卷

須川信行

邦光社の兼題名所花を詠める人々の歌を收め、明治三十三年印行す。

邦光社歌會十四集 一卷

須川信行

邦光社の兼題春々を詠める小松宮彰仁親王以下人々の詠を收め、明治三十四年印行す。

邦光社歌會十五集 一卷

同上、明治三十五年印行。◇信行は天保十年に生れ、渡忠秋に學ぶ。御歌所に奉仕。大正六年歿す。年七十九。

津島神社献詠集 一卷

尾張の津島神社に獻詠せるもの。題は社頭松、會頭徳川義禮の序あり。明治三十六年四月印行す。

津島神社献詠集十七集 一卷

首夏山を題に詠める人々の献詠集にして明治三十七年五月印行す。

草蔭和歌集

一 卷

橋木信房

津の歌人百人を撰び、その作一首より五六首までを抽きいて、後に各作家の略傳を添へたるもの。但し津の第一の歌人たる玄無法師の作は稍々多く取りたり。明治三十四年出版。撰者の跋あり、その撰集の目的など委しく述べたり。集名は安濃にかゝる枕詞に由りたるならむ。

教科適用 中古歌選

一 卷

三輪義方

三代集の歌を首とし、之に新古今集を加へ附録に萬葉の歌を抄して教科用とせるもの、明治三十一年目黒書店にて發行す。◇義方は天保九年に生れ明治三十五年歿す。年六十五。横山由清等に學ぶ。女子高等師範教授たり。

歎冬の加吉葉第三篇

一 卷

江幡通理

秋田地方の人々二百五十人の作七百四十首を部立して明治三十一年印行せるもの。

都島集第二編

二 卷

財部實秋

八田知紀が都城附近の門人の詠を撰びたる第二編の舊稿を多少の手を加へ明治三十二年に上木せるもの。東久世通禧の題言、税所敦子の序、實秋の跋あり。上卷春夏秋冬、下卷冬戀雜に分つ。卷頭には高崎正風の朝拜の歌あり。

明治才媛歌集

一 卷

石川正作

阪正臣、下田歌子の評所々にあり。雜誌などに出てたるを輯めたるもの、明治三十四年東洋社發行。

竹柏園集

二 卷

佐々木信綱

第一編は明治三十四年二月、第二編は同三十五年五月博文館より發行す。同氏の主宰せる竹柏會諸人の作を輯む。

邦光社月次歌集

山本彦兵衛

東久世伯を會長を仰ぎて人々のよめる歌を集めたるもの。明治三十四年第一集を、同三十五年第二集を、同三十六年第三集を、同三十七年第四集を出す。

あふひの露

一 卷

京都公卿華族間の歌の會、向陽會の人々の詠約百首を撰び明治三十五板上板せるもの。

庭の摘草 一 卷

村松今朝二郎

黒田清綱翁門下の人々百二十餘人の詠に税所敦子刀自のよしと評せられたるものを輯む。終に翁の歌徳記を合刷す。明治三十五年十二月。

筑波集 一 卷

岡吉胤

類題集にて歌數三千數首、書名は多く常陸の人の作を取りたるに由る。福羽美静の序あり。明治三十六年發行す。

忠烈歌集 一 卷

歌道奨勵會

征露の役に方り上下の人々のよめる忠烈の什を宣戰の大詔捧讀より樺太の占領に至るまで、時局の順に連ね、渡邊千秋の序を加へ、始に御製御歌并に皇族方の御歌を擧げ、終に軍歌を載せて大日本歌道奨勵會より明治三十七年に出せるもの。

わさほのかづら第四篇 一 卷

石川貞風

秋田地方の人人の詠を集めて三十七年に版行せるもの。

征露歌集 一 卷

山田正賢

征露の役に際し、上は昌子内親王殿下より下一般の人々の詠を撰び、阪正臣の序、大口綱二の跋を加へて明治三十七年出版。

ときのひびき 一 卷

及川義亮

日露戰役に際し人々のよめる作を集め、明治三十八年出版す。仙臺地方の人の作多し。田邊知事の題詞あり。

明治勅題歌集 一 卷

福田滋次郎

年々の勅題の歌を集め明治三十八年に出版す。

玉鐸集 五 卷

神田息胤

大八洲學會などにて人々のよめる歌を集めたるものにて明治四十年發行す。

昭代集 三 卷

矢島作郎等

明治聖代の秀歌を集めむとて、矢島作郎、鎌田正夫、千葉胤明三人が諸家の什を撰び、四季戀羅に分ち、高崎正風、本居豊顕、小出繁の校閲を請ひ明治四十一年出版せり。

歌集 五 琴 一 卷

佐々木信綱

竹柏會の人人の作を撰す。明治四十一年四月發行。

世々のあと 一 卷

佐々木信綱

國初より近世までの代表的短歌を時代順に並べたるもの、父弘綱の撰みしを十七年祭の記念として、近世歌人年表和歌系統圖を補ひて四十一年出版。

川中島懷古集 一 卷

安川保等

川中島をよめる古今の歌を集む。小杉樞郎、淺井洌の校閲、明治四十一年發行。

あゆちがた 一 卷

佐藤如春

名古屋歌人の歌會たる厚情會の歌集にて四十一年大口綱二氏の序を加へて出版。

まつらのよりも 一 卷

平戸の人々の歌を集む。丸山正彦の點せるもの、明治四十二年平戸國風會にて發行。

常磐會詠草(初編) 一 卷

細川道契

小出繁、大口綱二、佐々木信綱、井上通泰の組織せる常磐會の歌三十九年の第一回より三十四回のを纏めて明治四十二年出版す。

第二篇は三十一回より四十八回までのを、第三篇はそれより七十回迄の分、即ち四十三年九月より大正元年九月までのを井上通泰發行す。以下四篇五編續行す。

國民歌集 一 卷

佐々木信綱

年歴により神武天皇より明治の御代に至るまでの人々の國民精神を諳へる短歌長歌合せて六百六十首を年代順に撰びたるもの。明治四十二年民友社にて發行す。

歴代御詠集 一 卷

柴田勇之助

上は素蓋鳴尊より聖上の御製までを挙げ、次に明治二年より四十一年までの新年勅題の歌を抄して出し、終に聖德遺訓等を誌して四十四年出版。

園原和歌集 一 卷

熊谷直一

信濃の園原古跡保存會にて古今の人々の園原をよめる歌を集めたるもの、首に角田忠行の撰にかゝる園原碑、東久世通禧、黒田清綱の題辭、富岡鐵齋の畫、寫眞等を載せ、四十三年出版す。

四、類題集

總説

題林といひ明題といひ類題といふ、字義に於いては、少異なきにあらざれど、今合して類題の一に攝す。抑も佳歌を撰ぶと、題を設けて證歌を集むるとは、事相似たるが如くにして實は否らず。殊に作家の詠せし當時の境地、言換ふれば詞書の如何に頓着なく恣に題を附し類によりて歌を集むると、一定の部目を立て題の如何に拘らで佳什を抜くとは、その趣大いに異らざるを得ず。前者はいはゆる題林若しくは類題集にして、後者は撰集なりとす。

題林集の古く物に見えたるは藤原清輔の題林百廿卷とす。その内容は歌合卅卷、會卅卷、百首卅卷、雜々卅卷と八雲御抄に見えたれど、夙く逸して傳らず。現存の題林和歌抄及纂題和歌集は作者及成生の時代明かならざれど、蓋し足利時代の末期のものなるべく、山科言緒の題林愚抄これに繼ぎ、正徳年間に刊行せし新題林和歌集、及憐霞齋の新續題林和歌集次第にその名を襲ぎて出たり。明題の名は今川了俊の明題和歌全集を始とするか、これに先だち定家の作と傳ふる二四代集あり。八代集の歌を抜けるに對し、了俊は新勅選以下の十六代集の明題を作る。この書一に二八明題和歌集といふ。風雅以下新續古今に至る明題集なり。二四代集は十全なる明題集にあらずといへども、以上三書にて略々勅選廿一代集の題歌を見るべし。

次に類題集は後水尾院天皇の欽撰に始まるか、蓋し撰集廢れて年久しく、之が復興の大御心を懐かせ給ひしかど、時運到らず。纔に侍臣に命じて題を部類しこれが證歌を撰ばしめらる。題をとる一萬三千。未だ適當なる例歌なきものは題のみを存す。寫本僅かに兩三部、水戸中納言これを日野弘資卿に請ひ山本春正をして一本を謄寫せしめたりといふ。斯くて後、勅撰類題集の題號を下し、やがて板に上せらる。夫木集に帯ぎて大なる集の一なりとす。後武家などの歌をも取り入れたる内藤侯の續類題和歌集生じ、尋いて露元天皇の勅説により新類題和歌集は成る。前者につぎて近代の歌までも部類せられたり。

その後はこの二書の増補時代ともいふべく、或は摸倣時代とも名づくべし。即ち類題落穂集の如き、新類題落穂集の如き、殘林拾葉集の如きは前者の例にして、拾題和歌集の如き、明題拾要抄の如き、袖中證歌集の如きは、後者の例とすべし。又後水尾院以降の人々の歌を類題とせるものには、新明題和歌集、新後明題和歌集、新題林和歌集、新續題林和歌集、部類現葉集及撰玉類題集等あり。これらは撰集に新また續等の名を踏襲せると異ならず。

その頃より、古今集、源氏物語の歌の類題を生じ、頓て又家集若しくは數人の集の類題漸く行はるるに至れり。堂上派にて最も好く讀まれし草庵集の類題は蜂谷又玄により、三玉集類題は松井幸隆によりて、まづ元祿八年と九年とに上板せられ、次いで新古今時代の六家集類題、及源三位録倉右大臣藤原清輔三人の集を類集せる和歌隨葉集は成り、新三玉三槐和歌集の類題も生じたり。これらによりて當時和歌の風尚を見るべし。

それより武者小路實陰、望月長好、松井幸隆、契沖、似雲の如き徳川時代に於ける人々の集を類題とし、或は古に溯りて紀貫之、四行法師、宗良親王、正徹等個人の集をも類題とせり。その以後に於ける類題集中古今六帖等の歌を多く取れるには、村田春海の歌苑古類題抄あり。三代集を基とせるには、岩上とは子の三代調類題あり。後拾遺以下の集を取れるには、近藤芳樹の風月集あり。續詞華集等平家時代の歌を取れるには、蓮阿の中古和歌類題あり。中古六歌仙の集と順徳院の御集とを類題とせる松平樂翁の獨看和歌集あり。卅六女歌人のみを採れるには鈴木基之の類題玉臺歌撰あり、その他はしがきのある歌のみを集めたる古詞類題の如き、假名句題類題の如きは稍々詭を異にせるものとす。徳川時代の半ば以降より末期にかけて幾多の類題生じたり。それらの中には私撰集とも見るべきもの少からず。よりて私撰集の部にも述べたるが、この時代の末期に於て、最も廣く用ひられし類題集は清原雄風の恰野集、木村定良の草野集、蓮阿の紅塵類題、加納諸平の鯨玉集、長澤伴雄の鴨川集等とす。恰野集は古歌を旨とすれど、他は近世若しくは當代の人々の詠を類題とせるものにて、古學派の人々の作を見るには、草野集を最とすべく、その以前に成りたる紅塵集類題これに亞ぐ。菓集につとめて清新なる作を多く載せたるは、鯨玉集を推すべし。類題を選ぶには廣告を發して地方に歌を募る。世間名を好むの徒は代作を以てせるもありしならむ。或は自家の佳作を賣つて世を晒せしもありといふ。諸平の鯨玉を撰むや諸國より送り來る詠も多く、これを置く爲に新に家を改築せりといふ程なりき。かくて一編二冊つつとし第七編に至りたり。

又中央及地方にて出せる類題多きが中に、仲田顯忠の武蔵野集と、長澤伴雄の鴨川集とはその名に冠せるが如

く、一は關東の作家を、他は京都の作家の詠を收めたる如く、地方々々の歌人の詠を多く採りたり。これらの集には皆終に作者姓名録を挙げたれば、地方に於ける斯道に志ある人名を見るべし。但しその作品はその地方の山川風土をよみたるもの多少これあるべけれど、當時中央の歌風に則ることをつとめ、その地方色を出すことを圖らざりしが故に、いづれも同趣の作多く、書の外題と作者とをとり換ふれば特に差別を認めざるもの少からず。惜むべきことなり。尙この作者姓名録の如きも優なる歌人の傳記資料のさしはさまれたらむにはと思はるるもの皆然らざるなし。この點に於て霞關集の如き草蔭集の如きは吾人を益すること少からざるなり。

書目解題

明題和歌全集

十五卷

今川了俊

古今集以下十六代の勅撰集の歌をとり、部を立て題によりて集めたるもの。古寫本六卷、外題して二八明題といふ。刊本は十五冊とす。

續五明題和歌集

六卷寫

今川氏親

二八明題の續集と見るべく、風雅集、新千載集、新拾遺集、新後拾遺集、新續古今集五集の歌を題の次第によりて集めたるもの。永正十二年の序あり。◇氏親は義忠の子、修理大夫と稱す。文明三年に生れ、大永六年に歿す。年五十六。

題林和歌抄

二十六卷寫

四季、戀、雜、公事、人名、短歌、俳諧歌、賀の部を設け、廣く顯詠の歌を輯む。一より四まで春、五より七まで夏、八より十一まで秋、十二より十四まで冬、十五より十八まで戀、十九より二十一まで雜、二十二公事、二

十三人名、二十四短歌（今いふ長歌）二十五俳諧歌、二十六賀の部とす。著者明かならず。宮内省圖書寮本。

纂題和歌集 四卷 寫

廿一代集及物語等の歌を抜き、節用的に分類せるもの。完本を見ず。第三卷は氣候に関する歌、第五卷は草、第六卷は木、第七卷は八倫、第八卷は雜、第十卷は形體に關する歌を集む。圖書寮に缺本あり。編者を知らず。足利末期若しくは徳川初期のものか。後考を俟つ。

題林愚抄 九卷

山科言緒

題を四季戀雜に分つ。撰集百首歌合等より歌をぬき、上に題、次に出典、次に作者を載す。九卷本あり六卷本あり。寛永十四年丑四月村上平樂寺開板。群書一覽に立仲の作なるよし云へるは言緒を誤れるなるべし。◇言緒は言經の子、天正五年に生れ從三位參議に昇り、元和六年薨す。年四十四。

題林類葉集 三卷

古來の撰集家集中の歌を題名のいろは順にあげ、出處を上、詠主を下に記す。歌數三千に近し。

百題拾要鈔 十卷

後水尾院

一字御抄を改題せるもの。結題中に含める虚字を、いろは順に列ね、各題に數首の證歌を載せたるもの。例へば鶯出谷、鳴鶯入霞、春到氷解等に於けるが如し。終には數字對字重字の題、及證歌を載す。元祿四年に上板す。十卷二冊とす。

勅撰類題和歌集 十六卷

後水尾院

侍臣の人々勅を奉じ 四季戀雜公事と部を分ち、上は王公より下は庶民に至るまでの古今の歌を輯む。題一萬三千餘、中に就き題ありて歌の關けたるもの千七百餘、これは夫木集などによりて題をすゑ置かれ、然るべき例歌を見出でて填めさせられむとの思召なりしなるべし。始め外題もなかりしが延寶中に成り、類題和歌集と題し給ふ。元祿十六年刊行す。刊本は三十一冊。寫本にては、十六卷本、十卷本あり。歌に多少の増損あり。稿本を補ひたるか。別に目錄三卷あり。圖書寮には、平松三位以下公卿十人の執筆せし善本あり。

續類題和歌集 六十四卷

阪以得

葛山散人以得が岩城侯内藤左京太天義泰の命を奉じ、後水尾院の勅撰類題和歌集を修補せむとし、五百十九部の

書を参考とし、彼の集に載らざる歌を新古となく廣く集めて三百卷を撰す。部を八つに分ち假名題を追加とす。義泰の漢文序あり。延寶元年に着手し、貞享五年に成る。その中現存せるもの春夏の部六十三卷、別に序、凡例各一卷あり。◇義泰始め頼長、中頃義概、後義泰と改む。元和五年に生れ、貞享元年從四位下に進む。同二年卒す。風虎と號す。歌俳を善くし集あり。讀文庫はその書庫の名なり。

類題落穂集 四卷寫

後水尾院の勅撰類題和歌集に題ありて歌なきもの千七百餘首の中、證歌となるべきものを一題一首づつ撰みたるもの。但し尙缺けたるもの半ばあり。前に集に與かりし、しなどの追補せしか。

拾題和歌集 十二卷寫

惠藤 一雄

廿一代集、三玉集その他家集歌合等の歌を、四季戀雜公事の部を立てて集む。自序及貞享五年進藤知雄の跋あり。◇一雄は飛鳥井雅章の高弟たる河瀬管雄の門人なり。

新類題和歌集

二十卷寫

烏丸光榮 等

靈元天皇の勅を奉じ、烏丸光榮、西三條公福、水無瀬氏成、高松重季、武者小路實陰五人、古今の歌を集め文明

永正の頃の御會の續歌百首の類に及ぶ。廿卷三十冊本あり。又十五卷本、十三卷本あり。雜部には勅撰類題和歌集と異り、釋教題、經文題をも加ふ。

新類題落穂集

四卷寫

新類題和歌集に題ありて歌の缺けたるを、勅選類題和歌集によりて補へるもの。作者を知らず。

和歌明題拾要抄

七卷

頼阿後柏原院等の詠數千首を類題とす。元祿七板上板す。

草庵和歌集類題

六卷

蜂谷 又玄

頼阿の家集を類題とし、卷末に句題百首、大神宮參籠百首、八景和歌その他新續古今に入りたる家集の外の歌を載す。元祿八年武井新兵衛同伊兵衛開板。寛延四年重刻し、安永四年浪花岩崎徳左衛門等再重刻す。刊本一卷袖珍本とす。

同 拾遺 一卷

同

草庵集にもれたる百首、高野日記の四十八首、國分寺十樂庵記等を集め、末に二條良基の觀應三年の百首に頓阿慶運、兼好の點あるものを附刻す。

釋教題林集 八 卷

淨 惠

元祿八年刊行。譯和集の部を見よ。

三玉和歌集類題 七 卷

松井幸隆

後柏原院の柏玉集、西三條實隆の雪玉集、冷泉政爲の碧玉集の三集の歌を集めて、類題とす。元祿九年蜂谷又玄の跋あり、板行。寛政四年板は九本とす。

殘林拾葉集 一卷 寫

山本紀内

勅撰類題和歌集に闕けたる歌を自ら詠せるもの。歌數二千二百餘。元祿十二年並河良弼の跋あり。◇紀内は諱を道春、豆山と號す。

袖中證歌集 二 卷

廿一代集、六家集、三玉集、その餘の集の歌を抜き、類題とせる袖珍本にして、一題一首を擧ぐ。十六卷二冊。寶永元年上板。

類題六家集 十八 卷

藤原伊清

長秋詠草、山家集、拾玉集、月清集、壬二集、拾遺愚草を類題とせるもの。古寫本は六卷。寶永元年藤原全故の序を加へ、京と大阪とにて出板す。

新明題和歌集 十 卷

後水尾院集以下近體の歌を類別す。寶永七年以上板す。刊本六冊。又四卷本あり。二卷本あり。

新後明題和歌集 大六 卷

伯水堂梅風

前書の續集ともいふべし。部立として一題二首づつを掲ぐ。題數二千百六。作者は仙洞、堯然法親王、後西院天皇、飛鳥井雅章、邦永親王、後陽成院、公澄法親王、基福、通村以下の人々。享保十五年庚戌仲夏西村市郎右衛門同源六藏版。

古今和歌集類題 一卷寫

松井幸隆

古今集の歌ごとに同じ心同じ詞の歌を集めて類題とす。その出所は、萬葉、廿一代集、菅家萬葉、古今六帖、夫木、六家集、及物語家集歌合等の歌を用ひたり。

おきつ浪 三卷寫

源氏物語の歌を、四季雜賀の六門に分ち類題とす。圖書寮に古寫の一本あり。

假名類句和歌集 二卷寫

陸翁

定家卿の比より足利時代にかけて假名句題を部立して撰びたるもの。享保丙年仲春洛北散士睦翁の長序あり。かな句題の變遷を説けり。彰考館にはその撰にかかる浦之玉藻と題せる六冊の刊本あり。

和歌類葉集 二卷

源實朝、源賴政、藤原清輔三人の歌を類別せるもの。日本諸家人物誌によれば河瀬普雄の撰とせるが如何あらむ。

新題林和歌集 十六卷

後水尾天皇、靈元天皇、道見法親王、堯然法親王、素然等近古の歌を類別す。正徳六年刊行す。

部類現葉集 十六卷

白水堂梅風

一名近代和歌部類といふ。勅撰類題の體にならひ、新題林前後、即ち慶長より正徳頃までの歌を集む。享保二十年の自跋あり。刊本三卷とす。

新三玉和歌集類題 二卷

後水尾天皇の鷗巢集、中院通茂の老槐集、烏丸光榮の榮葉集の歌を抜きて類題とす。

芳雲和歌集類題 六卷

武者小路實蔭

武者小路儀同三司の歌を類題とす。歌ごとにその年月を詳にす。集の題名は櫻町院の勅賜といふ。寶曆十年の奥附あり。天明七年刊行す。刊本一冊。

吟藻類題 一卷寫

武者小路實蔭公の集を類題とせるもの。圖書寮に一本あり。首に系圖及櫻町上皇が公の一周忌に下し給ひし御製

二首を掲ぐ。安永二年の寫本あり。前書と大同少異なり。

桂雲集類題 六卷

望月長好

安永九年望月長好の百回忌に方り、有賀長收等長好が家集廣澤輯藻及其の遺稿の歌を類別す。桂雲集と號するは『よしやふけ秋の草木のあらし山月の桂に雲ぞしをるる』の名吟集中にあるに由る。卷末に文章數篇を載す。翌天明元年上板。刊本一冊なり。

新續題林和歌集 十六卷

憐霞齋

新題林和歌集の續集にて、享保千首、寛延千首、延享千首、義正打聞等の歌をも集めたり。作者は靈元天皇、實陰、爲村、光榮、爲久、公福、通夏等の廷臣、職仁親王、家仁親王等なり。圖書寮には堤景雅の寫本あり。明和元年上板。

千首部類 二卷

尾崎雅嘉

爲家、正徹等の千首より享保寛延の千首を類題とす。安永四年刊行す。

漫吟集類題 四卷

下河邊長流その友契沖の集を類題とす。天明七年、龍公美四季の部を十卷に分ちて刊行せしが燒矢す。よりにて文化十一年再刊。石津亮澄の跋あり。

瓜堂和歌集類題 五卷

澄月の序を加へ、寛政七年五月増田源兵衛板行。京大圖書館本。

撰玉類題和歌集 六卷

部類現葉集の誤を正し、刪補を加へたるもの。寛政八年刊行す。澄月の序あり。有賀長收校正す。

新三玉集類題 一卷

靈元法皇御製、中院通村、烏丸資慶の詠を三玉類題の體に倣ひて撰せるもの。寛永八年に刊行す。

三槐和歌集類題 一卷

新三玉集の例に倣ひ、中院通村、同通茂、同通躬三公の歌を類題とす。寛政八年慈延の跋あり。刊行す。

五葉類題和歌

一卷 寫

磯野政武、横瀬貞臣、近藤保好、近藤孟卿、津村正恭五人、初春待花以下同題にてよめるもの。各人四十八首宛。寛政八年三月谷胤昌の寫あり。中古叢書九十七卷に收む。◇貞臣は後侍従となる。◇政武は御小姓、丹波守と稱す。◇保好は表御門所頭、芳山と號す。◇孟卿は保好の子。◇正恭は町屋にて通稱小三郎。いづれも霞關集の作者。

似雲集類題

一卷

續似雲集類題

二卷 寫

似雲の詠集年並草二十卷より抜きて類題とせるもの。その第一集及第二集なり。

李花和歌集類題

二卷 寫

尾崎雅嘉

宗良親王の李花集、その他に見えたる親王の御歌を類題とす。終に南朝五百番歌合を附録とす。蓋し親王はその判者にして、且つ悉く判の歌を添へられたるに由る。寛政八年上木。

續撰吟和歌集

一卷

尾崎雅嘉

文明永正頃の禁裏御會諸家續歌等を輯めたる續撰吟和歌集を類題とす。もと北畠親顯の自寫の一本は題の次第もなかりしを更に部類して寛政十二年袖珍本として上木す。

新續撰和歌集類題

二卷 寫

同

文明永正大永頃の諸家の打聞續歌百首を輯めたる歌集を類題とす。群書一覽にもいへるが如く、この書題の數を多く取めあるを以て會席に携へて證歌を求むるに便あり。

類題證歌集

八卷 寫

同

延喜天曆の昔より當代まで、一題一首乃至三五首の證歌を撰び、假名題、句題、詩句題、故事題、經文題、物名題、名所題二萬五千を輯め類題とせるもの。

玉々集

一卷 寫

四季、戀、雜の部立をなして、後水尾院、靈元院、道長法親王、中院通茂、同通躬、同通村、飛鳥井雅章、鳥丸資慶、

日野弘賢、清水谷實業等雲上公卿の作を精撰せるもの。薄葉古本、歌數多し。撰者を知らず。三矢重松氏藏す。

五 鳳樓 一卷寫

三玉集の作者以下、中院通村卿等の歌を、立春以下題によりて輯めたるもの。時代不明。京都帝國大學に一本あり。

類題玉臺歌撰 四卷

鈴木基之

中古以降の女流大家和泉式部、赤染衛門等卅六人の集を類題とす。

歌苑古題類抄 十二卷寫

村田春海

古歌集六帖等より多くよき歌を抜き、春夏秋冬戀雜に分つ。近世名家著述目錄等に二十卷とあるは誤なり。反故を裏故して記せり。黒川眞道氏原本を藏す。

類題伶野集 十二卷

清原雄風

中古以來諸家の詠を集め類題とす。四季を六冊、戀雜を六冊とし、歌數千首を集む。自序、橘千蔭の序、村田春

海の跋あり。文化三年に成る。薄葉四卷本あり。明治廿七年再刊す。

掌中伶野集 一卷

同

文化四年上刻。

類題名家和歌集 三卷

似雲

文化九年袖珍本として上木。

山家集類題 二卷

松本柳齋

山家集の歌千五百六十八首を類題とす。元長宰が蓋により編むといふ。小川萍流の序を加へ、文化九年刊行す。

類題名家和歌集 三卷

高井八穂

文化九年刊行す。◇八穂は通稱伊十郎、高井宣風の子、古詞類題を著し、又天保八年父の集春雨集を出す。

草根集類題 二卷

安田躬弦

正徹の草根集中、辭なき歌を抜き、清水濱臣の序を加へ、文化十一年袖珍本の類題として刊行す。巻首の草根集私鈔大意の説見るべし。◇躬弦は通稱を一庵といひ、醫を業とし、歌は加茂季鷹に學び、家號を東本といふ。文化十三年歿す。

中古和歌類題

二 卷

川島 蓮阿

續詞華集、萬代集、秋風抄を主とし、家々の集及定家家隆の自撰集より三萬六千首を抜きて類題とす。刊本一冊
◇蓮阿は清水濱臣の門人、聽雨庵と號す。

紅塵和歌集類題

二 卷

蓮 阿

上卷四季、下卷戀雜物名旋頭歌長歌とし、長流契沖以下季鷹大平の頃までの知名の人々の歌を輯む。文化九年刊。

新紅塵和歌集類題

四 卷

一 柳 嘉言

古今諸家の歌を類聚せるもの。文政十三年の自記あり。刊本二冊。◇嘉言は村田春門の子、通稱を七郎といふ家吉葛廬と號す。畫を善くす。嘉永二年歿す。

古詞類題

二 卷

高井 八穂

古集百十部より、事少き端書の歌を抜き、四季雜畫の四部に分ち集めたるもの。眞名題に對し假名題のみを集む。岸本由豆流、榑原安浦の序あり。文化十四年刊行。

草野和歌集

十二 卷

木村 定良

契沖長流以下古學者の詠を類集せるもの。題數約八千、歌一萬幾千に上る。四季戀雜十二卷。文化十三年稿を起し、文政元年成る。同二年水室長翁及濱臣の序あり。一名を草野集類題といふ。◇定良は書を善くし歌は橋千蔭に學ぶ。通稱駿藏、樞園と號す。幕府の與力となる。弘化三年歿す。

狂歌題林抄

六 卷

百尺 樓桂雄

萬代集、撰吟集、古今六帖、夫木集、家々集物語等より近世までの狂歌六千餘首をぬき部類を分ちたるもの。中院家の松風軒の序を加へ文政元年吉田新兵衛等の書林より發行す。

題詠連璧集

一 卷

草庵集と鈴屋集とを合せて類題とせるもの。文政元年尾張の岡田正秀の序を加へて上木す。

三家類題抄 一 卷

森 廣 主

新古今時代の後京極攝政定家隆三家の歌を抜き類題とせるもの。文政元年に成り。同五年板行。市岡猛彦の序あり。◇廣主は尾張の人、鈴屋の門。

廣類題和歌集 三十六卷寫

萩 原 廣 道

古今の歌を広く集めて類題とせるものにて、春五卷、夏三卷、秋七卷、冬三卷、戀四卷、雜十三卷、拾遺一卷には職人盡歌、羅利留禮呂歌を類題とせり。序跋なし 自筆稿本松井簡治氏珍藏す。

累葉集類題 二 卷

累葉林葉二集を高木則流の類題とせるもの。文政三年に刊行す。

三代調類題集 三 卷

岩 上 登 波 子

三代集の調宜しき歌、及これに類へる歌を六帖、歌仙家集、夫木集等より集めて、四季戀雜の部に分ち類題と

す。文政四年本居大平の序、同五年藤井高尚の跋を加へ上板。◇登波子は三河の吉田の人、岩上傳大夫の妻。本居大平の門、中山美石等を友とす。

獨看和歌集 十 卷

松 平 定 信

新古今時代の大家なる六家集、及順徳院御集を、春夏秋冬戀雜贈答と部立して集めたるもの。北村季文の序及公の自跋あり。文政九年上板。◇定信は田安中納言宗武の子、白河の城主、四位少將、十一代將軍に仕へて老中の筆頭となり鋭意寛政の治をはかる。寶曆八年に生れ文政十二年に卒す。年七十二、守國公と諡す。著書極めて多し。

類題若菜集 二 卷

積 書 堂 光 英

當時平安の大家、蘆庵、默軒、通運、澄月、慈延、高蹊等五十二人の歌を乞ひ集めて類題とせるもの。荷田信美の序あり。文政十年上板。

類題和歌補闕 六 卷

加 藤 古 風

勅撰類題集に題ありて歌なきを、文明永正頃の諸家の書より抜きて補へるもの。文政八年の自序、成島司直等の

序、大熊璋の跋を加へ上板。司直の序により、古風の略傳を考ふるを得。◇古風は忍の藩士、和歌十體考の著あり。

類題 饅玉集 十四卷

加納 諸平

近世諸家の歌自他を問はず撰びて、四季戀雜の部立を設け集むるもの。詠史も多く優れたる作多し。初編は文政十一年に、二編は天保四年に、三編は同七年に、四編は同十二年に、五編は弘化二年に、六編は嘉永五年に、七編は同七年に上板。以上毎編二冊宛とす。明治二十七年及三十一年に活版に附す、刊本三冊なり。類題集中草野伶野と共に廣く用ひらる。◇諸平は遠江白須賀の人、夏目懸磨の子、幼名見瓶、紀伊の加納氏を襲ぐ。柿園と號す。文化三年に生れ、安政四年に歿す、年五十二。

言靈舎廣吟萬玉集 四卷

速 滿

一萬首の歌を安らかに詠ましめむが爲、珍らしき題を撰み、鈴屋翁の諾せられたる例歌を舉げ奥に勝地例を加ふ。天保十年上木。

類題 葎居集 二卷

物集 高世

西南諸國の人々の當時の作を集め、四季戀雜に分ちて類題となし、天保十年上板。

貫之集 類題 二卷

鈴木 信成

貫之集、及集にもれたるを、勅撰集等より補ひて、九百十一首を得、類題とす。天保十四年海野游翁の序を加へ刊行す。◇信成は海野幸典の門人、江戸の人。百人一首解を作る。

類題和歌作例集 小四卷

長澤 伴雄

歌詞の珍らしく耳なれぬもの、若しくは古俗言方言はどいへりしものを含める歌を普く抜き、部立によりて排列す。弘化四年千種有功卿の序あり。翠年板行す。◇伴雄は紀伊の人、通稱衛門、本居太平並に内達に學ぶ。絳石の舎と號す。幕末に方り諸國に使す。後獄中に死す。

類題 鴨川集 八卷

同

近古の歌九千餘を輯む。京阪地方の人の作多し。饅玉集と異り、詠史歌は省きたり。太郎集は嘉永元年に、次郎集は同二年に、三郎集は同四年に、四郎集は同五年に上梓す。各集各二冊。修理太夫植松雅恭の序あり。明治七年活版に附す。

類題吉備歌集

二卷

藤井高雅

淺野由隆の吉備歌集に基き廣く集めて類題とせるもの。高雅の高枝といひし時代の作にて、弘化四年山田球の跋あり。嘉永三年上木。◇高雅は高尙の子、吉備官司となり、下總守と號す。

類題三家和歌集

三卷

殿村茂濟

本居家の三代宣長、春庭太平の歌を類題とす。嘉永四年日下田足穂の序あり。六卷三冊とす。◇茂濟は攝津の今宮の人、通稱伊三右衛門。草垣舎と號す。有賀家の門人。

打聽鶯蛙集

二卷

本居豊穎

眞淵以下近代の人並に親戚の人々五百三十二人の歌を類題とす。嘉永五年刊行。◇豊穎は内連の子。幼名仲衛といふ。東宮侍講に任じ文學博士となる。秋屋と號す。大正二年薨す。

類題武藏野集

二卷

仲田顯忠

第一編は寛政の末年より下は嘉永の當時まで、紅塵草野二集に入らざるものを取り、部立を設け嘉永五年上板す。

第二編は最初京阪の人々のを取らむとせしが、恰その時鴨川集の出でたるより、諸國の人々の歌を取る。終に人名索引を附く。安政四年刊行。◇顯忠は江戸の人、通稱藤右衛門、蓬園と號す。

双玉類題

二卷

同

木下長嘯子松永貞徳兩人の歌を類題とす。

類題眞金集

二卷

藤井尙澄

後松屋が社中の人即多く吉備地方の人々の歌を類題とす。嘉永五年上板。

類題現存歌選

二卷

海野幸典

天保九年當代歌人三百人の詠を撰みおけるを、歿後七回忌に方り、清水謙光等上木。嘉永七年源忠實の序あり。卷末に作者姓名録を載す。◇幸典は江戸の人、游翁といひ柳園と號す。寛政元年に生れ、嘉永元年に歿す。年六十。前波默軒に學ぶ。

類題採風集

四卷

黒澤翁滿

初編は嘉永七年に刊行す。水谷氏古の序及自跋あり。二篇は安政四年中林古樹の序あり。翌年上木。

類題稻葉集 二 卷

中島宣門

明和の頃集めたる稻葉集を本とし、これに近代の因伯二州の人々の詠を加へ類題とせるもの。首に松平慶徳公の歌二首を加ふ。嘉永五年白井治堅の序を加へ、安政三年上木。◇宣門は鳥取の人、文化四年に生れ明治二十七年に歿す。年八十八。回水園と號す。衣川長秋、伴信友、齋藤考磨に學ぶ。

類題風月集 三 卷

近藤芳樹

後拾遺以降の歌を抜く。歌數凡三千。書名は『風と月とのあるじなりけり』の歌に資る。萩原廣道の序あり。嘉永六年成り安政五年上木。

類題青藍集 二 卷

秋元安民

同時の作者五百九十一人の歌を抜く。嘉永六年千家尊孫の序あり。終に人名索引を附す。安政六年上板。◇安民は姫路の人、通稱正一郎、野々口隆正の門に入りその女婿となる。國事に奔走し、慶應三年歿す。年四十に満たす。安政三十六歌仙を撰ぶ。

類題清渚集 小三 卷

熊代繁里

本居内遠、加納諸平等五百餘人の歌二千八百餘首を収む。右中將公正の序山内繁憲の跋あり。安政五年上板。◇繁里は紀伊の三名部の人、本居内遠及加納諸平に學ぶ。田邊藩修道館の教官となる。明治九年歿す。年四十八。

類題和歌玉藻集 二 卷

村上忠順

近代の人並に門下の詠を類題とす。但し小澤蘆庵が六帖詠藻、千蔭が朧か花及草野紅塵にも入らぬ歌を取る。安政六年の自序。文久二年千家尊澄の序を加へて上木。作者二百二十四人。歌三千六百五十首。

彩霞集 四 卷

黒川春村

新井守村、鈴木重胤等の如き、多くの人々の詠を輯む。始には霞、歸雁、遅日等の題あり。上板。但し年月詳ならず。

類題春草集 小二 卷

物集高世

主として同時西南地方の人々七百五十三人の歌を類聚す。安政六年倉成直幸の跋、萬延元年中島田翁の序あり。

文久二年上木。

類題玉籠集 三 卷

近代の人々三百二十人の詠、千八百三十八首を類集す。文久三年上木。◇久敏は上野の人、橘守部に學ぶ。家を松蔭と號す。尙さしも草の條を見よ。

飯塚久敏

類題麓玉集 六 卷 寫

古今集の小町伊勢を始として下は續古今の四條高倉に至るまで、すべて天長承和の頃より弘長文永の頃までの女流作家の詠を撰びて、四季の類題とせるもの。始に引書百十八部を擧げ、作者目録には小傳を附したり。自筆本佐々木信綱氏藏す。

横山由清

類題衣手集 三 卷

常陸地方の人々の歌を集む。間宮永好の序あり。文久三年上木。

朝比奈泰吉

類題三河歌集 二 卷

竹尾光久

三河の人々の作を類集す。村上忠順の序羽田野敬雄の跋あり。護玉集、賀茂川集、鶯蛙集、武藏野集等に入れる作は省きたるよし自序に見ゆ。卷頭に大河内信順侯の立春の歌を擧げたり。◇光久は三河の人。

類題千船集 二 卷

佐々木弘綱

萩原廣道の志をつぎて同時の人々の詠を廣く集め、四季、戀、雜、物名、折句、旋頭歌、今様に分ちて類集し、終に姓名録を載す。安政元年藤原純門の序あり。同二編は文久元年中島廣足の序を加へて上刻。萬延元年共に再板す。同三編は元治元年出版す。

類林和歌復葉集 二 卷

橋本直香

第一編は今多く見ず。佚したるか。第二編は元治元年に成る。多くの題を擧げ近代の歌を集む。

類題清風集 一 卷

鈴木雅之

近代の人々の詠を類聚し、其の師伊能顛則の序を加へて慶應三年に上木す。

類題新竹集 三 卷

猿渡容盛

近古以來武蔵相摸の人々五百十五人の歌を集む。慶應三年に成り明治四年伊能穎則の序を加へて上木。◇容盛は文化八年に生れ明治十七年に歿す。武蔵の府中の大國神社の祠官、父盛章の後を襲ぐ。

類題明治新和歌集 一 卷

同

明治の始までの人々の歌を類題となす。明治四年に成り、伊能穎則の序を加へて上木。

類題月波集 二 卷

近藤芳樹

四季懸雜の部立として人々の詠を集む。初編二冊明治七年上木。

類題明治歌集 二 卷

朝比奈泰吉

常陸地方の人二百六十八人の歌二千五百三十五首を類題とせるもの。間宮永好の序を加へ、明治十三年上木。

類題石川歌集 二 卷

高橋富兄

加越能三州の作者四百八十五人の詠千十五首を部立せるもの。明治十年高林景實の序を加へ翌年上木。

類題和歌聯玉集 二 卷

毛利千秋

圓珠庵契沖以下現代の人の作約一萬を類題とせるもの。岩崎維謙の序を加へ明治十二年出版す。◇千秋は筑前の人。

類題秋葉集 二 卷

彈舜平

近代の作家四百五十五人の詠を部類せるもの。佐々木春夫の序、中村良顯の跋を加へ明治十四年上板。

類題採風集 二 卷

物集高世

春草集の三編を出さずなりたるを遺憾とし近代の人三百三名の歌をぬきて類題とせるもの。明治十四年上板。

類題鏡池集 一 卷

下田吉蔭

肥後の國の人々の詠を部立す。鏡池とは鮎祭にて名高き阿蘇社の廣前の池なり。その名に取る。小山多乎理の序あり。明治十六年上木。

類題芳風集 二 卷

住谷明宣

七十賀に方り祝の歌を集むる代りに近人五百二人の作を部立せるもの。明治十八年出版。

明治類題桑乃若葉 二 卷

拜 卿 蓮 茵

明治の人の作を類集す。朝彦親王の題字を乞ひ、村上忠順の序を加へ明治十八年出版。作者目録は五十音順とす。◇蓮茵は京都の人、梅花園と號す。御杖門。

類題新英集初編 二 卷

井 上 淑 蔭

八十三翁井上淑蔭の自序あり。明治十八年上木。

類題新英集二篇 二 卷

井 上 喜 文

前の續集にて、鈴木弘恭の序あり。明治十九年活版に附す。作者目録は國分とす。

類題秋草集二篇 二 卷

彈 琴 緒

近代の作者千二百二十三名の歌三千三十六首を類題とす。佐々木春夫の序を加へ、明治二十年出版。

汲 古 集 一 卷

近 藤 清 石

大内氏實録を編纂せしに方り、大内氏に關係ある歌二百二十七首を見出て部立して類題とせるもの。卷頭大内義隆の梅有佳色を詠せる「めもはるに洩れぬ草木の中にも名のらてしきる梅の初花」の歌あり。杉重華の題を加へ、明治二十四年に出版す。

類題近世和歌集 二 卷

上 田 維 曉

賀茂真淵以下當代までの人の作を部立し、上巻四季、下巻を戀雜とし、終に新題部を設け、明治二十五年青木嵩山堂より出版。

類題正葩集 一 卷

島 多 豆 夫

明治三十二年出版。

大日本歌書綜覽 上卷終り

大正十五年八月十日印刷納本
大正十五年八月十五日發行

〔非賣品〕



大日本歌書綜覽
上卷

著者 福井久藏

發行者 石川清晴

印刷者 渡邊順三

印刷所 東京市外池袋一―二五
光文社

東京市牛込區喜久井町二十九番地

發行所 不二書房

電話牛込五五六番
振替東京七四四六番

校正責任者 石川清晴 裝幀 大坪一作
製本者 東京市神田區錦町三丁目二十四番地 遠藤榮次郎
彫刻者 東京市神田區錦町三丁目四番地 三井常吉

大日本歌書綜覽姉妹篇

1933
駒澤大學教授 福井久藏著
文學部元教授

大日本歌學史

四六判・六百頁
天金染布裝幀
定價三圓八拾錢

和歌が我が一切の文學の源泉にして今尙國民詩として尊ばるるは何人も否むべくもあらず。さればこの歌が如何にして起り如何に發達せしか、將た如何なる宏才の士現れていかに世の詩人を導きしか、抑も我が國民生活と和歌とは如何なる交渉を有するか、我が歌は如何なる種類を有し如何なる性質を具ふるか、過去を省みて我が歌の將來は如何、此等一切の問題を解決すべきは一に歌學の史的研究に俟たざる可らず。著者この著をなすにあたりて稿を改むること二回途中大震火に災せられて世に出てすなりしを更に稿を改めて世に問はんとせるもの。その眞摯的態度を以て、從來世に出てし無數の歌學者をいかに見、いかに扱ひて、斯界に新しき記念塔を建てむとするか、且つ又現代の歌人歌學者をいかに批評し觀察せるか、歌學史の類書なき今日切に大方の精讀を乞ふ。

東京市牛込區 不二書房 電話 五五五五番
東京市牛込區 不二書房 電話 五五五五番
東京市牛込區 不二書房 電話 五五五五番

R911.103
F76

終